大きな足の
ナナメから
B
STUDIO4951

#「shiasatte」番外編（前編）_1

　一一四国の徳島では、阿波踊りを契機になれそめが生まれる、ということが、往々にしてあるらしい。
　そういう話をきいたとき、それは、とても省エネ型の恋愛模様であり、しごく狭い世界の出来事のように、この偏屈な主人公、阿刀明美（あとうあけみ）には思えた。
　齢い、三十。もはや、自然な出会いなど限界であり、かといって、婚活という響きもバカバカしい。二十代をさんざん自由に生き、婚期を逃してしまった自覚はあるし、スピリチュアルを嫌いながら自分を探してバカだと気づいた。
　巷では、「街コン」などという商業ベースにみごとにのせられた、くだらない出会いの場が提供されているが、いや、そういう現場こそ、ろくでもなさそうな男が集まっていそうで、かえって出会いを遠ざけた。
　それが、祭りに出かけただけで結婚ができるならば、
「世話はない・・・」
　と、悔しさを見下しにすり替えて、鼻で笑った。
　なぜなら、低燃費とは違って省エネは、目の前にあるものにとりあえず手をのばす、いわば、所有欲ではなく獲得欲に重きを置いているかのような、しかもそれが至上主義になることで、視野狭窄になる。
　明美は、獲得と獲得後の状態を最上のものとし、そのプロセスに目がいかない恋愛になど興味がなかった。
　また、その交錯距離の短さは、いまだ村社会から抜け出せない日本においての田舎臭い習わしのように、このときの明美には思えてならなかったし、そのくせ、田舎臭い「純愛」に憧れても、男の前で頬を赤らめる奥ゆかしさもない。
　なるほど、ことごとく自分を美化して、「愛されること」にのみ興味を持ち続けた空虚な日々が、求愛のエネルギーたらしめる敗因だ。
　とはいえ、愛とは何か？　わかったためしは、一度もなかった。
　試みに、伊藤整の「変容」を引いてきても、愛とは何かわからないとあり、愛とはいわば、執着という醜いものにつけた美化された呼び名だという。明美は、そういう得体のしれないものに固執して独りを貫き、一生、風当たりの悪い生活を続けるくらいなら、
「そろそろ・・・」
　心の基礎に、せめてコンクリートくらい流しこむこともやむなしだと思った。

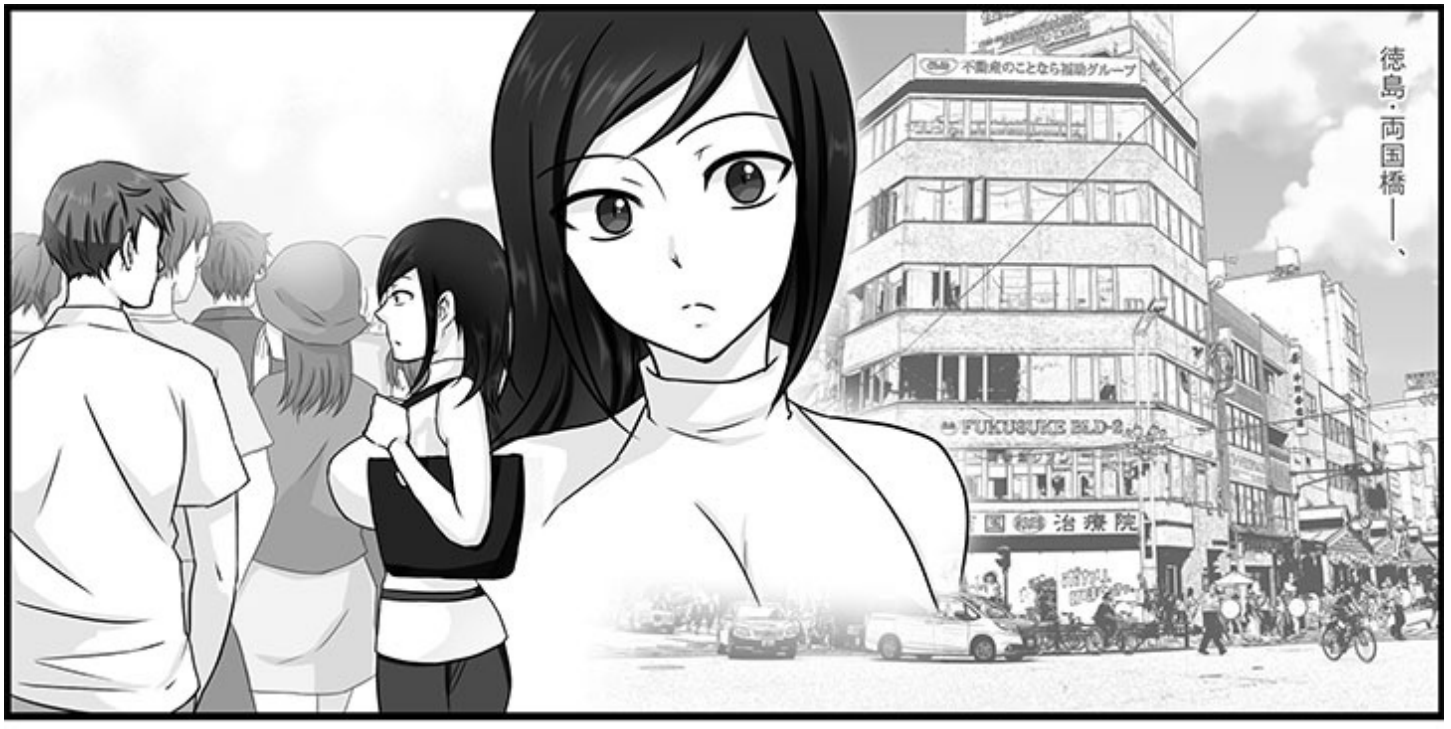
　あれから（遍路）、三年が経った。加えて、三十三歳。千葉へ戻った。結婚もした。子供がいる。男。
「一路（いちろ）」
　と名付けた。二歳になる。
　目元、鼻筋、髪の質一一、どれをとっても、明美だけで産んだかのように似ているが、性格はいたって大人しい。
　この女の子供の頃は、それほど大人しかったわけでもなく、適当に「子供」であったが、一路

はぐずりもしなければ、甘ったれでもなく、こういうところは似ていないのだ。
　母親としては、しごく楽な子育て生活なのであるが、内心は、バタバタと駈けずりまわって、ケガの心配でもさせていてほしいという二重構造の母親観をもっていた。
　一路と名付けたのは遍路体験のせいではない。もし、そうであるならば、道はいくらでもあるという意味で「幾路（いくろ）」とでも名付けたかもしれない。
「そうすりゃよかったのに！」
　と、たびたび、マオは言っている。
　マオは、週末ともなると予定もないのか、わざわざ横浜（実家に戻った）からやってきては、子守りをかってでて、報酬にたらふく飯を食べて帰るので、ありがたいのか、ありがたくないのか、判断ができない。けれども、
「ちょっとでも損害を一一、」
　与えて帰らないと気がすまないのか、トイレの水を何度も流したりして、ささいな贅沢を楽しむ影にウィットが見えて、なかなかどうも憎めない。しかも厚かましいことに、冷蔵庫や戸棚の中の物は、片っ端から、
「整理しといた」
　と、腹に移動させて、アレがない、コレがないと言うのである。
「お母さーん、お菓子が足んないよぅ」
　と、一言。ただ、マオは明美の作る料理を、美味いと頬張る。そういわれると、それでいいのだから、マオの人心収攬術にいつもはまった。
　とはいえ、二言目には、
「味が薄い・・・」
　の大合唱だが、これは、元栄養士の職業残滓（ざんし）だからどうにもできない。

　さかのぼって、結局、この女二人は、四国を一周してしまう。すると、この土地に少なからず愛着ができてしまったのか、夏ともなると、愛媛から反時計回りに四国の祭りをほうぼう見て回るという恒例行事になっていた。
　結願（全て終えた）、一月下旬。妙に晴れやかな落ち着いた心で半年ばかり過ごした。
　明美は、気づきの二重構造（気づくことが大切、何に気づくか）と花鳥風月を手に入れた。
　前者はさておき、千葉にも、季節のめぐりは当然ある。しかし、荒んでいた過去の明美には、寒いだの暑いだのという感覚しかなく、鳥が飛んでいようが、その辺に花が咲いていようがどうでもよかった。
　それが、遍路を終えてみると、ふと風の匂いに気づいてみたり、カメラで空の表情やその辺のものを撮ってみたり、なにかしらの感受性が芽生えた。いや、芽生えたというよりは、もともとあったものが帰ってきたとでもいえる。
　その子供じみたささやかな感受性が、外の世界へと視野を広げるきっかけとなるのかもしれない。

　この年の八月、例によって徳島でのこと、明美は、小学生時代のクラスメイトに出会した。

男子。むろん、相手は気づかなかったが、この女は気づいた。
女が三十路に突入すると、多少なりと過去を振り返る生き物になる。明美も例外ではなく、二十年以上も前の少年の面影を歳月の成長プロセスを逆算して、
（もしや・・・）
と、思った結果である。
中肉中背、容姿、可もなく不可もなく、成績普通、運動普通、いわゆる平均過ぎてパッとしない男で、特に興味もなかったのに、知らない土地で見つけてしまうと、とたん親近感が湧いてきて声をかけてしまった。
人だかりの両国橋南詰め、一体、自分は、
（何がしたいんだろう・・・）
と明美は思った。とっさに、女から声をかけてうまく行く道理がないことくらい経験則として知っているから、昔話を肴に酒でも酌み交わし、成り行きと祭りの開放感によって、アバンチュールでも楽しむつもりではないかと、ふと今履いている派手な下着を思い出して、我に返った。
男は、驚きながらも、そう言われると記憶が蘇ってくるのか、神経言語プログラミング（一点を凝視して思い出す）に隠れたむっつりなのか、ノースリーブの明美の胸とワキの辺りを凝視しながら、じんわりと記憶を掘り起こした。
親戚が数人いるらしい。
「そうなんだ・・・」
これがはじまりで、結果、明美は、この男を選んだ。
そして、省エネ型と嘲笑った形式にみごとにはまった自分の因果が奇妙に思えた。


徳島・両国橋――、
不動産のことなら福助グループ
FUKUSUKE BLD-2
治療院

「いっちゃん、いっちゃん」
　マオは一路をそう呼んだ。それでいて、一路が近づいてくると、
「呼んだだけ～」
　というように、明美と同じく、一路もマオのからかいの対象で親子揃って遊ばれた。
　一路は子供ながら迷惑そうな顔をしているが、妙に子煩悩なマオに相手をしてもらっていると、好きとも嫌いともいえぬ奇妙な安心感でひかえめになついた。
　しかし、このような暮らしもあと数日で、明美は一家で神戸で暮らすことになっている。
　夫の転勤である。いや、転勤というよりも、本社移転が本当だ。
「サプライチェーンの分散と電力と賃料と――」
　理由は多々あれ、先の震災の影響が遅れながら作用している。近々、やってくるであろう南海トラフ地震、電力及びガスの自由化、はた迷惑なオリンピックと、中央集権から一段逃げるように、適度な街に落ち着くのは、地方都市と会社の事情によるものも大きい。
「しかし、ここは、大丈夫なのか？」
　もっとも、それは、地元から離れることへの抵抗をけむにまいた表現で抑えているだけで、本当は、かすかなエスノセントリズム（自分のところが一番）の作用にすぎない。もともと人間は、隣の芝は青いと思っているが、刈り取る間際は、自分の芝も捨てたものではないと感じる。
　両親には、
「着いて行け」
　と言われる。
　ただ、息子の一路が神戸で馴染み、物心ついたころには、おそらく関西弁をしゃべっているであろうことを想像すると不思議な気分になっていた。

　震災は、千葉に住む女の人生に、かすかながらに作用している。
　大局的にみれば、震災を口実とした経済の西日本シフト、主権をはき違えた首都機能分散、影に隠れておかしげな参院選改革のブロック整理と地域政党の台頭により、いまこそ道州制へという日本崩壊への節目であったが、メディアは原発と補償一色で、大事なことがさらりと決まってしまっても、人々は、自分のことでいっぱいだ。
　これは、希望的観測に左翼的現実を織り込んだ、いわば「パラレル・フィクション」として書き進めたいが、地震は必ずしも悪であるという結果のみで終わらせてはいけない。
　このような時代にこそ、世界の認識を改めて、自分たちの生き方に問題があったのではないかと再考しなければ、震災にあった価値もないが、幸い、地震に触発されて日本人の美意識の残滓が掘り起こされたとはいえないか。
　それが集結して、結束感が生まれ、精神的なものを立て直す契機と――、なるに越したことはないだろう。
　語弊を覚悟で書けば、現実は、大地が揺れた程度で、日本人が向上するわけでもなく、その他もろもろの問題が解決するわけでもない。
　だから、政治は相変わらず混迷していても、世直しのための設計主義が、右側の人間を巻き込んで、過去から引きずったものを切り離す作業ばかりをしている。

　その結末が、言い出しっぺの抜けたTPP、EPA、FTAと自ら捧げた包囲網と民間議員らによる国柄の喪失。
　株だけは上がって、筋の通らぬ偽りの繁栄と不確かな希望に閉塞感だけを内包して、木の実の取れないキツネのように、ガラス越しの好景気を傍観している。
　とかく明美も、そういう世間の一住人であり、一種、世の中はメディア的メタファーとしてしか見ておらず、およそ、どこに住めども、
「液状化と原発ーー」
　がなければ、どうでもよかった。

　ひとつ、心配事がある。マオである。明美は、保護者でもないのに、この二十六歳の将来が気がかりだ。それは、明美が結婚して主婦になり、女でいう「向こうのライン」に行ってしまった余裕なのかもしれないが、三年余で五回も職を変えてふらふらしているマオが危なっかしくて落ち着かなかった。
　ある時は、市の職員、ある時は、居酒屋の店員、オペレーター、水泳のインストラクター、エンジニア。このご時世にあれこれと雇ってもらえるマオの才能は、明美の謎のひとつである。
　例え職をなくしても、
「〇〇生命の社員（単なる加入者）である」
　と、相互会社をいいことに、世の中をからかって、生保レディ面をしていた。
　いまは、以前務めていたシステム会社に身を寄せているが、二言目には、
「辞めたい」
　という。
　日本の会社だったが、いつの間にか本社がロシアになりインドになり、不備な引継ぎのまま、他社とのオフィス共有で、わけのわからないままイスに座り、座っていれば金をくれ、いわば外資系の公務員のようだと思うのである。
「だって、アホばっかなんだもん！」
　マオの開口一番は、これである。また、この女は、愚痴をひとつ吐くと、その愚痴が枝分かれし、しかも、その原因を分析し展開していく頭のようで、いわば、論理立てて怒るらしい。
　それを晴らすためーー、
「じゃんじゃん頼むよお母さん！」
　と、たらふく食べることで発散している。
　マオは、表面こそ快活で気楽に見えているが、このご時世、ウェルメイドプレイ（最後にはうまくいく）の補償はない。
（大丈夫なのか？）
　明美がそう考えるのは、無理もなかった。なにぶん、明美にとってマオは、妹のようなものである。
　一路のめんどうもよく見てくれるから、この二歳児にとっては、おばのような第二の母のような存在である。
　家族なのである。それでも、
「出生率向上のため・・・」

と、明美宅で泊まることは一度もなく、こういうところは常識的なのか、単にからかっているだけなのか、他人行儀な不文律がある。
そのさみしさを心配にすり替えて姉面しているのだとすると、マオにとって、明美は一体なんなのだろうか。
姉であるのは、時間だけが決めていた。

千葉での生活が一週間を切った。
「・・・・・・」
明美は、二度と戻れないわけでもないのに、感慨深い思いで部屋で昔を思い出してため息をついたり、自転車で街をうろうろして子供時代の記憶を懸命に探った。花鳥風月もあるから、細い路地や土手をそれで走る感覚が、まるで自分が、「少年」のようだと思った。
しばらく走ると、昔、友人との待ち合わせ場所だった駄菓子屋が小奇麗になって、いまだ営業を続けていることに驚いた。
あの頃の面影は一切ないが、この店であることは間違いない。一瞬、昔の記憶が明美の脳裏に滝打った。
ミルクパン十円、ヨーグルト二十円、くじ引き三十円ーー、
（まだあるのだろうか・・・）
そう考えていたら、無意識に店の前に立っていた。そして、惰性的に、そのまま入った。
「いらっしゃい」
と声をかけられたが、子供の社交場に三十路の女がのこのこと足を踏み入れている状態が妙に気恥ずかしくなって、そそくさと店を出てしまった。間際、駄菓子の値段が昔よりも高いような気がして、日本は本当にデフレなのだろうかと感じた。

帰宅すると、一路がいる。平日。
（しまった！）
と思った。
同時に思考は、連日、送別会を口実にして家を空けていた夫が、一路を保育園に迎えに行った結果だろう、と、理解した。
しかし、夫が一路を迎えにいってくれたことは幸いで、本当は、明美がそうするつもりで家を出た。それが、物思いにふけって保育園にも行かずに駄菓子屋によって何食わぬ顔で帰ってきた自分のしでかしにヒヤリとしていた。
事情を知らない夫は、勝手に迎えに行ったことを、ただただ詫びてへこへこしている。

書き忘れていたが、明美の夫の性は「大塚」といい、しぜん、大塚明美になっている。成長過程にブランクはあるが、もともと幼なじみのクラスメイトなので、明美は、
「大塚くん」
などと呼んだりしている。夫は、
不満そうな顔をするが、尻に敷かれて受身の愛を美徳とするタイプなのか、何も言わない。

口論になっても必ず引き下がり、夜の勤めともなると、
「あの・・・、そろそろ・・・」
と、膝をついてこちらを向くというフヌケっぷりで、数年前の明美は、このような男は軽蔑の対象でしかなかった。しかし、このフヌケでなければ、自分の維持が難しいことも知っている。
いくぶん、成長したのだ。

一路は大塚のことを、
「パパ、パパ」
と呼ぶくせに、なぜか明美のことは、
「かーちゃん」
と呼ぶ。これも、マオが、
「あんた（一路）のかーちゃんはーー、あんたのかーちゃんはーー」
などと繰り返すので、一路もそういうものだと思っているのかもしれない。

「まだ（保育園は）早かったんじゃないかーー」
大塚は、一路と遊びながら、幼い我が子を半日も「専業主婦」から引き離すことがかわいそうではないかとこぼしたりするが、
「集団生活が人間を作る！」
というマオのすすめで放りこまれた。
つまり、マオの方針が大塚家では蔓延しており、しかも、誰もマオに逆らわないから、誰が主であるのか疑わしい。
しかし、それでいいのかもしれない。親は愛情を単に過保護にすり替えてしまうふしがあるが、マオはあくまで他人で中立的な判断で一路に接するから、二歳児にしては物分かりのいい子に育ちつつある。
それでも、延長線上には、マオの斜線的な影響が親という存在を分裂させてしまう日をもたらすのではないか、そう考えると、しばらくマオから離しておいたほうが、息子のためだとも思えた。
また、そういう負の口実を無理やり創りだすことで、千葉から離れることの緩衝材として機能させようと明美は懸命だった。

「神戸のどのへんに住むんだろうね？」
明美は、大塚にそうきいた。
どういうことかというと、会社に着いていく社員の住居は会社が用意することになっている。また、大塚は連日家を明けっぱなしだから、一度も下見にいくことがなかった。大塚は、自分の力の及ばないことには無関心なところがあり、
「どうせ、住むとこ決まってんのにーー」
見ても意味がないというのだ。その通りだと思う反面、儀式形式として、明美は見ておきたいような気もするのだ。
神戸といえば、山と海に挟まれた細長い地に高層ビルがびっしり林立していて、東京が大阪な

らば、横浜は神戸だという、おしゃれなでハイカラなイメージを持っている。もっているから、休日には家族で高台から神戸の街並みを眺めて、一路を水族館にでも連れていき、三宮で食事する、というあくまで観光気分な想像をふくらませて、
（千葉より良いだろう・・・）
　と、美化をはじめた。美化でもはじめないと、なじみの土地を離れる覚悟の醸成を鈍らせるのではないかとも思った。

　翌日、いつものようにマオが夕方やってきた。明美は、少しうっとうしい感じがしていたが、しばらく会えないかと思うと、そういう気持ちも少しばかり和らいで、むしろ、もう少し騒がしくしていてほしいとも思う自分が奇妙に映った。
　マオは、自分の家のようにずかずかと上がりこみ、ソファに腰掛けると、開口一番、
「四国でカフェをやる」
　と、さらりと言う。明美は、なんの冗談だろうときいていたが、冗談を冗談にせずに生きてきたのがマオという人物だから、もしや、本当にそうなるのではないかという、マオという表現者の隠喩感覚で、
（本当だろう）
　と思った。
　よく女は、ベイズ理論だか秋の空だか知らないが、感情易変性を振り回して、男からすると、統合失調症のようなことを言う。
　しかし、マオは、有言実行を美徳としており、ひとたび口にして、もしそれが不可能だとしても、どうすれば可能になるかという算段をするのである。だから、四国でカフェという発想がある以上、いかようにも、そうなるように、マオは自分を仕向けていくにちがいない。
「どこでやるの？」
　明美は、不思議と驚かなかった。
「決めてない」
「はぁ？」
「まあ、ダーツでも投げて決めますか」
　そういうと、マオは、かばんからタブレットパソコンを取り出し地図を映し、
「このへんにしよう」
　と、四国の中心を指さした。
「ここ、何県？」
「どこでもいいのさ」
　マオのこういうときの発言は、実に本当くさい信ぴょう性がある。一見、その程度の検討で物事を決めていくのは軽率とも思えるが、熟考がベストを生み出してきたためしもないから、およそ、このような感覚で自分の身を適当に放り投げてみて、自分がその地に適合していくほうが、案外、楽で安定をもたらす生き方かもしれない。
　そういうことは、かつて、二人で四国を歩きまわったときに得た感覚だ。マオは有言実行な女である。身がるでもある。やるというのであれば、やるのかもしれない。
　また、マオはエンジニアでもある。

「いいや、ただのフリーターさ」
　この女は卑下するだろうが、ここはそういうふうに呼んでやる。エンジニア的な発想からすると、この時代は、「クラウド」と「ノマド」という言葉が人々を都会から開放している。それは、ずいぶん前から到来していた。しかし、それには弊害がある。
　大企業は、「垂直統合機」という諸刃の剣で自爆寸前であるし、補助金を求めて田舎へ逃亡したところで、ひと時の福利厚生にしかならず、むろん、過疎対策の効果など皆無だ。
「SO（サテライトオフィス）」
　などというと聞こえはいいが、それが最適なのは簡素な作業が前提で、骨をうずめるともなると、やれスーパーがない、銀行がないと困りだしたら、何かにつけて生活できない。
　残る者はといえば、都会ではやっていけないような連中ばかりが田舎のB層につけ込んで、補助金を搾取して生活するのみならまだしも、地域おこしの名の下、政体の変更とグローバリズムを叫び、先人が築き上げた中間共同体を食い漁ることに終始する。
　つまるところ、下手に都会風を吹かせて田舎に移っても、地元に迷惑をかけるだけであり、(補助金サヨクかよ・・・)
　形をかえた共産主義を押し付けてたまるかと、スタバでマックを広げる連中を笑った。
　だからマオは、田舎で住むには、少しばかりの、
「ライセンスがいるーー」
　と考えている。
　この女のいうライセンスとは、あれこれと要求せずに、現状を見つめ、工夫し、足るを知る生き方といえるかもしれない。
「ロハスな生活でもするつもり？」
「だーれが、おしゃれ貧乏になるかっての」
　だから、会社法下にいないリベルタンのマオからすると、ハンパな自分を認めつつ、口当たりの良い田舎生活とITとの融合をまるで新しい社会主義のように鼻で笑って、キーボードを打っている方が、憧れの「気まま人」へと一歩近づく。
　一方、地方創生がうたわれるさなか、補助金ありきの息切れがおこした空洞化に、再び補助金を入れて「創生」などと呼ぶバカバカしさに、いつまで騙され続けねばならないのであろう。
　企業論理からすると、本音は、不景気による都会での維持費低減が田舎シフトへの原動力である。大塚の転勤もそうかもしれない。
　したがって、わけがわかってさえいれば、
「どこでも住める」
　というのがマオの生活思考であるようだ。
「田舎でコーヒー豆でも売りますか」
「ホームページできたらおしえるね」
「お姉は神戸でしょ。いっちゃん連れて遊びに来なよ」
　マオの顔は妙に明るい。明美らの転勤に合わせたわけではないが、かつてから計画があったのだという。職を転々としたのは、やりたいことが見つからなかったのではなく、何でもやってみたいという想いと、目的のための一通過儀式とひまつぶしによって成された結果だ。

　希望に満ちた、チャレンジャーの顔をしている。
（成功するのではないか・・・）
　と、明美は不思議な確信をもって豁然と思った。
「うん。（遊びに行くのは）免許とったらね」
「えっ！　もってないんかい？！」
　今度は、マオが明美にあきれた。

　遍路がテーマで出発した物語にしては、妙にわざとらしく感じるが一一、
　世の中に、神の采配というか、必然、摂理という見えない行動心理に基づく運動方法があると過程するならば、波長同通は、ときとして、ポアソンクランピングを引き寄せる。
　何が言いたいのかというと、同じような人間は、同じようなことをするといいたい。昔の本にも、人間は、どんなに欲しようが企てようが、結局は、あらかじめ画された道になると書いてある。
　そういう仕組みと人間や会社的な公式を当てはめると、なるほど、二人は同じようなことをやっている。

　一年が経った。
　マオから書きたい。
　マオは、宣告通り四国に移った。それは、適当に決めた結果で、徳島県であるようだ。
　指さした場所は、徳島県は東みよし町というところで、後にわかったが、四国どころが特異点でみると、日本の中心を抱える町である。
　そこで、
「カフェをやる」
　などと声高々だったが、現実、人口の少ない田舎町よりも、もう少し都会に行かないと商売にならないことは、経営感覚としては素人でもわかった。一方で、都会からIターンしてきた若者が洒落たカフェをやっている、ということが話題になり人気がでるかもしれないという算段はある。
　しかし、それは一時的で、たとえそれが都会であっても、独自性と多様性をもって商売しなければ、あっという間に、潰れてしまうことくらい、マオは、コモンセンスとして知っていた。
「であるならば一一」
　県庁所在地をマオは選んだ。
　徳島市応神町。大学近くに店をかまえた。京都は石清水八幡宮の別宮があり、そこの祭神(応神天皇)が地名の由来だ。
　なぜ、この地で商売を始めたのかは、いずれ述べたい。
　しぜん、学生が常連の店になったが、とりわけマオが好きな男子学生に占拠されていて、さしずめ、学生版のクラブのような雰囲気である。
「マオさん、（ドンパチ）ゲイシャな！」（※ドンパチ農園のゲイシャ豆のこと）
「お金あんの！？　缶コーヒーで我慢しなよ」
「ほれくらい、あるわ！」（※格安提供とはいえ、一杯700円）
「学生の分際で生意気な・・・」
　マオは、それほど好きではないくせに、どういうわけか、コーヒーの香りは好きらしい。
　とりわけ、早朝、朝日の差し込みがかった店内でカウンター越しにまるで水槽の魚を見るかの

ように通行人を借景し、豆の匂いを充満させて掃除をしたりタブレットで新聞を読んだり、一丁前に店の主をしている、いわゆる、そういう「自分」に見とれることが好きなのだ。
　十人も入れば満席の小さな店だが、一人でやっていくつもりなので、自分のサイズは知っている。居抜きではあるが、以前も喫茶店だったためか、雰囲気はある。
　全体的に、黒い木目。しかし、そのくたびれた感じが「雰囲気」となり、パキラを置いたり無線を飛ばしたりするうちに、「それなり」のものになっていた。
　開店、午前六時。閉店、午後三時。マオに言わせれば、
「労働基準法奨励・・・」
　などと言うが、単に眠たいだけである。
　学生には、もっと長く開けてほしいと言われるが、
「アフターフォー（四国はサマータイム）は、繁華街で遊べ！」
　とか、
「男がカフェでまったりなんか気色悪い！」
　と、このような具合で、それでも気さくが混じっているから、方針として客には受け入れられた。
　店が終わると、最近買ったヤマハの電動バイクで吉野川を渡りはじめる。
　渡ると書くと、たいそうなことのように聞こえるが、市内の中心部に出かけているだけのことである。
　マオの住む、応神町もぎりぎり徳島市内であるが、河幅一キロ以上もある吉野川が心理的な区画となって、
「あちら側」
　という感覚で中心部を見ている。住みはじめて気づいたが、田舎では、どうしても車社会からは逃れられないということで、地下鉄が走ろうとする気配など微塵もない。バスは都会並みに運行しているが、なにぶん車社会、渋滞を鑑みると、歩いたり自転車の方が格段に早いから、スクーターにでも跨ろうと考えるのだろう。
　マオの目的地は大塚家である。神戸ではない。吉野川を渡ってすぐの常三島というところにある。
　何の因果か、明美一家も徳島にいる。これは、ビジネスの成り行きであるが、根底に地震による西日本シフトがあるならば、その先には、組織のスリム化、再構築という作業が待っており、明美の夫は、
「左遷か横滑りか――」
　出世はしたが、徳島勤務を命じられて一年も経たないうちに、家族ともどもやってきた。
　大塚は、製薬会社に務めていてMR担当である。MRとは、医師などに薬の効能などを説明して売り込む営業マンのことで、本社の神戸で研究開発し、病院のやたらに多い徳島で売ってこいというのが会社の腹であるようだ。
　大塚は、その苗字のせいか、
「〇〇製薬の大塚ですー―」※大塚製薬は徳島発祥

　などと名刺を渡すと、
「ああ、あの大塚か」
　と、業界の巨人と勘違いされたりするが、実際は、小さなジェネリック医薬会社である。
　ジェネリックだから、既存の薬といかに同じ効能であるかを説得するということが仕事で、いわば、交渉人に近かった。
　明美は、相変わらず専業主婦をやっているが、一路の母親友達には、その県民性なのか、
「女も働かなあかん」
　とさんざん言わる。徳島では、パートは習い事感覚で、
「一緒にやろう」
　と、スーパーのレジ打ちをやらされたこともある。とにかく、徳島の女は、仕事が好きとしかいいようがない。
　これを世間では、女性が輝く社会という。加えて、やれ男女共同参画、雇用機会均等とご大層に持ち上げられても、平等と画一の境目が霞んでいくだけで、実態は、じっとしていられない女の権利を主張する一種のフェミニズムであることを知っている。
　しかし、明美は専業主婦も悪くはないと思っているし、女は女でしかできない役割があるから、何も子供を放っておいてまで外に出る必要性を見いだせなかった。
「家計が苦しい」
　などといって、共働きの正当化や、育児放棄と紙一重の待機児童問題も、息子がいる身になると、どうも、うさんくさく思えて仕方がないのは、偏屈な女の思考癖のせいかもしれず、
(預けるくらいなら産まなければいいのだ・・・)
　と、禅問答と化しつつある“保活”を横目に、どこか意地のような頭がまわった。
　いや、本当は、馴染みのない土地でファミリアストレンジャーからつべこべ言われ、二言目には、
「徳島は子育てに良い」
　などと押しつけがましくお国自慢をされることへの反発でもある。明美には、それらの発言が、文化的コンプレックスを埋め合わせているだけにしか聞こえず、その辺でカブトムシが捕れようが、フライにレモンを搾ろうがすだちを搾ろうが、とりわけ、日本人である以上、どうでもよかった。
　概して言うならば、かつて、よかったと思った場所など、回想の世界にとどめておいたほうが美しいということは、京都に移住した友人や、昔の作家も言っている。
　ただ内心、人間、生まれ育った場所によって、その先の人生が決まってしまうことへの不満がある。明美は、子供のうちは都会で育て、一路には、わずかながらの有限の可能性を試す場を与えてやりたいと思っている。そして成長して、田舎で暮らすという選択肢もあっていいのかもしれない。
　大塚は、のんきなことに、
「孟母三遷の教えーー」
　などともいい、千葉、神戸、徳島と住まいを変えたのだから、一路にはそれなりの教育である

と他人事のように話した。
　一見、土地にこだわりのない寛大さを披露していたが、なにぶん、夫は徳島に親戚がいるから、その言葉には説得力がない。
　一路は三歳になるが、この頃から、マオは、
「ドイツ式だ」
　と、一路を子供扱いせずに、同年と話すかのように接した。そして、
「日本の子供は幼稚だ」
　といい、
「幼稚なのは、周りの大人のせいだ」
　とも言う。
　本来、子供はなんでも理解可能だ。体力もある。
　マオは、例えば、難しい言葉もそのままに教え、幼稚語変換を一切やらない。列車に乗ろうがバスに乗ろうが一人だけ立たせる。もともと一路は、物わかりの良い子供であるが、公共の場でグズリでもしようものなら、
「あほう～！」
　とデコピン一発、それでいて、手だけはつないでいつでも歩いた。
　明美は、また何の風の吹き回しか、マオの教育方針が不可解でもあり、それでも、無関心でもあったりしていた。
　これは、一路の成長を決定づけるものであったが、この時点の明美には、その影響力にいささか鈍感であったことに気づくには後に十年以上かかった。

「相変わらず、お宅の料理は味気（薄味）ないねぇ」
「嫌なら食べんでよろしい」
　この日も、マオの常套句で団欒がはじまる。大塚は、付き合いが多いらしく、帰りは九時をいつでもまわった。
　それでも、元栄養士の管理下にいるためか、腹も出ずにスリムで、その配偶者も、一児の母親とは思えないほど、腹が凹んでいるのが、マオには不自然に思えた。
「早く帰ってきな！」
　と、いわれるのはマオにである。一方で、
「付き合いも大事だ」
　などとも言われ、どうやら、大塚もマオの二重拘束にはまろうとしている。それでいて、
「小遣いをもっとやれ」
　とマオに言ってもらえることが嬉しいらしく、なにぶん、この男は、マオにも頭が上がらなかった。

　意外に思われるかもしれないが、マオの好物は「そば」である。この日も、三枚もぺろりと腹に収めたが、濃縮タイプのつゆを明美が必要以上に薄めたといって騒いだ。

「スーパー貧乏かってんの！」
　とりわけ、マオは、この「薄める」という行為で人の質が見えると思っており、明美が、
「健康のため」
　だとか、
「節約のため」
　と、カルピスやら洗剤を極端に薄めることが許しがたい不満である。それでも、残さずに平らげてしまうところは、マオの育ちであるようだ。
　妙に平和な日常のように思えた。毎日の食事は、マオがやってくることによって、いや、マオもかもしれないが、慣れない土地での支え合いのように機能していた。
　一路は、今自分がどこで住んでいるのかという自覚もない。言葉のイントネーションも真っ白だから、保育園で覚えてくるのか、ときおり、言葉の端々に、阿波弁がまじっていて、
（染まりだしたか・・・）
　明美は、このスポンジのような息子に、不思議な印象をもっていた。しかも、一路は明美を「かーちゃん」と呼ぶ。
　このまま阿波弁が第一方言になって、成長して、
「かーちゃん、かーちゃん」
　と呼ばれたならば、いよいよ関西の子供の完成である。
「それでええがな、奥さん！」
「よくない！」
「何いうてんの！？　一路は大きぃなったら、マオちゃんとコンビ組んでに吉本入るんやもんなぁ。なぁ、一路？」
　マオは客商売がら得た方言コスプレでときどき明美をからかった。

　これより先、一路を基準に進めたい。
　一路、四歳。明美、三十五。マオ、二十八。
　マオは、ずいぶん「オンナのよう」になってきた。どういうことかというと、見てくれは何も変わりはしないが、三十に近づくにつれ、女の戒体（かいたい）とでもいう、女をやってきて備わった慣れというものが、表面にじんわりと醸しだされるのか、上着一枚脱いだだけで、その所作がいちいちいやらしく見えてしまうという、そういう女の年期ともいえる。
　それでいて、不思議なことに一人を貫いているが、中身は昔のままなので、相変わらずの人気である。
　この頃になると、明美は主婦友達から、またもやパートに引きずり込まれて、夕方までレジでピッピが日課となる。はじめこそ乗り気でなかったが、客と馴染みができてくると、案外、単純作業でもおもしろいらしく、小遣いを稼ぐがてら気分転換となるようだ。
　マオは先にも述べたとおり、三時に閉店なので、その足で一路を保育園に迎えにいき、店で明美を待つという生活で、気が向けば、営業再開、馴染みの客の中、一路をちょろちょろさせて、世間を少し学ばせた。

　一路を知らない大学生は、
「子供おったん？　うわぁ、ショック・・・」
　知っている大学生は、
「どこからさらって来たん？」
「せめて、隠し子かって言いな！」
　と、そのような具合で、そういう反応を観察しては、第二の母をおもしろがる。
「李下に冠を正してはいけない」
　そう、マオは、ある人から教わった。しかし、マオにしてみれば、独り者の女が、ベランダにトランクスを吊っている程度のことで、むしろ、そうやって世の中をからかってやるほうにおかしみをおぼえた。
「一路、奥に行ってな」
「うん」
「こら、あいさつ」
「いらっしゃいませ、ごゆっくり」
　妙に、本当くさい関係である。

　一路はパズルが好きらしい。
　と、周囲が気づいたころには、とてつもない思考、空間認識能力がこの四歳児に備わっているのではないか、という親バカも絡んだ発見だ。それでも、神童のように思えてならないのは、ただならぬ一路の回転である。
　この男児は、マオのタブレットで一人遊びを好んだが、ふと目をやると、膨大なピースやルービックキューブ、数独、考える事すら断念しそうな複雑な立体パズルでさえ、まるで答えでも知っているかのように、すいすいと問いていくのだ。
　マオは以前、リニューアルした姫路城の立体パズルを買ってやったが、ものの一時間で完成させた一路が天才だと思った。スカイツリーやあべのハルカスもしかり。
「あんたのアタマはどうなってんだぁ？」
　髪をぐちゃぐちゃにしながら、マオは犬のように一路を撫でまわした。すると、
「こうなっとる」
　と、真顔でアタマを向けるこの男児が可愛くてしかたがない。
　という旨を、ある人物にメールで教えた。
　誰か。
　方法は変われど、近況を伝えるのは、かれこれ二十年近くになっている。謎の人物というわけではないので、そろそろ登場させたい。
　ある人物とは、マオの叔父のことである。マオについては、あまり語らずにきたが、この女の人生は、少々、さみしい。
　六歳で父親を亡くした。母親はまいって床に伏せがち。心配してか、母親の兄である叔父が、マオの父親替わりをやってきた。

周囲の大人は気がかりだった。なぜか。
叔父は、何をやっているのか正体不明で、おどろおどろしい雰囲気ではないが、妙な覇気があって近づきがたいと大人は言った。とりわけ厳しかったわけではないが、緩慢でもなかった。ときに、放漫。子供目線だが、子供扱いは決してやらない。たばこはホープを吸って、
「二つセットで得な感じである」
と、つかみどころのない人であったが、この人物から学んだことは、幼いマオには多かった。
「正しいと思わなければ、親のいうことだってきかなくていいんだ」
「好き嫌いはダメだが、マズイものは食べなくてよろしい」
「悩む間がありゃ考えろ」
いちいち、的を得ていた。

金には困ることはなかった。大学まで出してもらったし、なにより、徳島での開店資金ですら、叔父のおかげといえるだろう。応神町という、まだ県庁所在地では開発の遅れた地に店舗を用意したのも、叔父の意向にそっている。
叔父は、投資という名目で出資して、経営の見通し報告、新製品の開発義務をマオに課した。ときおり、ふらっと店にやってくるが、物語上は登場させない。
「今回の新メニューは、たい焼き切り身サンドとスクエアバーガーです。前者は、白身魚のフライをたい焼きの型でプレスして、それを刺身のようにスライスしたもので――」
マオは、新商品の写真を叔父にさっそく送った。
（あしながおじさんみたいだ・・・）
心ではそういうふうに叔父をみているが、身体の部位でいうと、
（嘘。デカ足おじさん・・・）
と、二十八センチの大足男を、頭ではそういうふうに呼んでいた。

一年が経った。明美、三十六歳。三十六歳にして第二子が生まれた。女。
「幾美（いくみ）」
と名付けた。これは、大塚が勝手に考えた。この配偶者はへらへらと喜んでいたが、明美にとっては、逆子であるわ、なかなか出てこないわでさんざんな目にあったが、両家の親たちも、のんきに喜んでいいるだけで、喉元通れば、苦労はなかったことになるらしい。
また、一路が生まれたときは、
「待望の男の子だ」
と喜び、幾美のさいは、
「念願の女の子・・・」
と、つまり、どちらが生まれてもジジババは喜ぶようにできている。
明美は、幾美が生まれる寸前、歯医者で口を固定されて、ドリルでキンキンと奥歯を削られる記憶が鮮明に思い出された。それは、子供のころの、泣きながらの記憶である。
妊娠中は、子供に栄養をとられて、歯医者に通った。どうということはなかったが、昔経験

した、あの、
　ーーキンキン。
　という感覚が鮮明に聞こえた。その感覚の横で、大塚がハーモニカを吹いている。趣味でやっていることは妻として知っているが、毎晩、明美の胸でもワーブリングなどされようものなら、幾美が生まれても不思議ではなかった。
（ハーモニカのせいだ・・・）
　と、明美は思った。思ったが、難産すると、幾美のほうが愛着めいて見えるのだから、母親失格の手前かもしれない。
　なにしろ、一路にいたっては、ほとんどマオにまかせっきりで、まかせっきりでも、間違った躾はされないし、言う事をよく守る子供だったので、放ったらかしに近かった。
　マオも幾美よりも一路への感心が強いらしく、喜んではいたが、内心、
（女は苦労するぞ）
　と思っている。
「兄ちゃん、嬉しい？」
　マオは一路に訊いてみた。
「わからん」
「だよね。おっぱいは幾美のもんだもんね」
　そういうと、複雑そうなさみしい表情で男児は黙った。

　このお話は、フィクションであるが、幾美が生まれた年は、二〇一七年あたりになっている。
　さしさわって、日本に変化は見当たらず、景気も実感なき直列リカバリーで、コケそうでコケない。いや、本当は、パニックが麻痺して平常を装っていただけかもしれない。「苦」をでっちあげて海外に逃亡した企業は、国籍を失いつつあるし、庶民は、お決まりの諦観の美学で順応している。
　ゴールのない欧州危機の傍ら、ウォール街に仕掛けられる金融戦争と隠蔽された中国バブルは音もなくはじけてもなお、協調的保護主義もとれずに、マルクスの夢の続きを見ている世界は、グローバリズム一色で、
「発展はバブルの同義語」
　というどうしようもない脳天気さで、実態のない上り下りを謳歌していた。
　これは、絶対に成長しない人類には、どうしようもなかったし、後にも述べるが、歴史学者の文明論でいっても、春夏秋冬、季節がめぐるように、上り坂と下り坂が、いかなるものにも逃れられない事実であるということだ。
　新興国は、まさに、春と夏の時代をニューノーマルに引っ掻き回されて、二〇一〇年代を駆けずり回った。
　一方、明美たちの住む徳島も、文明論的観点で変化の端境期に直面していた。
　述べる前に簡単に説明すると、とにかく、何事も歴史に学ぶことが重要で、社会にしても文明にしても、実は大した成長などしておらず、いつの世も、同じことの繰り返しであるということ

である。
　そこで、歴史学者のアーノルド・Ｊ・トインビーは、文明は成長の果てに没落していくと言い、同じく歴史学者のオスヴァルト・シュペングラーは、春夏秋冬のごとく文明は巡り巡ると言っている。
　どちらも、文明論的悲観から出発しているが、災難を乗り越えた社会は発展し、挑戦と応答が必要であるとも言う。政治ですら、民衆（政治）、名声（政治）、金権（政治）、独裁（政治）、そして没落していくのは、古代アテネが証明している。
　これらを基に進めたい。
　意外に思われるかもしれないが、全国的に知名度も低く、田舎のイメージのする徳島県は、百年ほど前までは全国有数の都会であったという。都会であったが、産業構造の変化やモータリゼーション、あとこれは決定的なものだと筆者は思っているが、旧国鉄の民営化によって、四国の鉄道インフラ整備が後回しになり、サヨクめいた潔癖症の国民、市民が、公共工事を止めまくった結果が、衰退という形になっている。
　現在の徳島市の人口は三十万に満たない。が、都会の名残なのか、みてくれは政令都市と遜色ない。これは、合併を一度も経験せずに来た数字であり、常識的に自治体がくっついていれば、軽く、五十万人程度はいるという。少し、浜松や高知のように無理をすれば、徳島の都市人口は七十万はくだらない。
　少し脱線すると、たとえば、日本のGDPはアメリカの半分程度であるが、バブルの頃は大差なかった。また、国民レベルでは世界一リッチな国であったのに、成長を止めることに躍起だったので、いまでは世界で四位（EU含む）になっている。
　別の表現をすると、成長もしないで未だトップ群にいられることが奇跡といえよう。
　京都大の藤井聡教授は、他国並み、常識的に公共投資をやっていれば、もしかすると、いまごろ日本のGDPは千兆円以上あり、経済力はアメリカと同等だという。
　これは、実に驚きの事実であるが、よく似た構造が、この四国の徳島でも起きていた。
　しかし、春夏秋冬の文明論。文明論のサイクルは、およそ百年～百二十年で回っているので、冬の時代の徳島も、ほのかに春が差し掛かっている。
　まず、地震による経済の西日本シフトがあげられる。大昔から、徳島は四国のどの県民よりも大阪とのつながりが深く、大阪府徳島市などと言われても気にしない。神戸は淡路島とともに共有していて、同じ領域という感覚ですらある。
　一方、関西の中枢からみると、明石海峡と大鳴門橋のおかげで、四国はずいぶん近かろう。
　加えて、土地はあるわ、最低賃金は都会よりも低めである。大企業が、中小企業とその家族をひき連れて、四国、特に地理的に有利な徳島を選ぶのは当然である。出店コストも安いので、都会でしかみられないチェーン店も数多くある。これは、隠れた都市圏での、破格の戦略といえるだろう。
　また同時に、首都機能分散と道州制へという議論が起こっており、まだ首都移転にはいたっていないが、東北復興による道州制への嚆矢が、水面下でさらりと打たれてしまった。

四国州の誕生である。バカげたことに、州都は徳島である。
ここで視点を持ち上げて少々の懸念を書くと、筆者は、多少の裁量を地方に持たせることは望ましいと思うが、一国二制度や地方分権などは、国の崩壊へのカウントダウンだと考えているし、地方の制御は中央がやらなければならず、好き勝手やる州政府を生み出すことは反対である。
例えば、沖縄、北海道。放っておくと、あっという間に、中国とロシアのものになるし、「都構想」を掲げる大都市（大阪など）もスリム化の名のもとに権力争いを続けていくに違いない。
結果、およそ、じり貧政策の集大成となる。なぜなら、道州制は、分散広域の「集権」でしかなく、財政が増えるわけではないからだ。
他方、残念ながら、田舎（集権に反対）の自治体は、補助金のために緩やかな衰退策をいまだ取り続けているが、妙な「分権」と間違った「主権」により、突如、見放されるという、いわば、第二の三位一体の改革でしかなく、この政策は財務省しか笑わない。
また、比例代表制には目をつぶり、
「選挙制度改革」
と、道州制に移行したところで、それは、ゲリマンダー（選挙区を有利に線引き）の要素が強く、そこへ、
「公務員制度改革だ」
などと、本当は世界的に見ても少ない日本の公務員を減らし、実質、国会議員を増やすことになっていく。しかも、公選の名の下の比例であるから、無能なルーピーばかりが日本を動かすという危なっかしい状態になる。これを、
「設計主義（コントラクティビズム）」
という。
あしき近代主義、左翼思想の本質だ。民主化、民営化、グローバリズム・・・。
えてして、不幸な未来の幕開けである。

さて、この道州制。
局地的に見ると、香川と愛媛はおもしろいわけがない。が、地理的要因に、関西出身の知事が関西広域連合に加わって、あたかも大阪ヅラしてきた結果、あれこれと反対を押しきった。
「なぜに徳島ごときが・・・」
と、両県に思われてもしかたがない。もっとも、当の徳島は、四国他県にはあまり関心がなく、知らぬ素振りで、右から左へ、着々と舞台を整えた。
本当は、関西州に入ろうとしていた。しかし当然、入れない。なぜか。影響力の問題だ。
視点を少し持ち上げて他方を見ると、中国地方は、四国を取り込もうと目論み、とりわけ、広島と岡山は、愛媛、香川を向いている。
それへの牽制が、徳島を四国州都へという物語（思惑）につながる。
知事はいう。
「州都が都会である必要はない。オールバニ（ニューヨーク州都）を見なさい。徳島より田舎だ。GDPは、高松と松山で稼いでもらえばいいんです」

　そして、
「四国は、デンマークになる」
　とも言った。
　つまり、適度な都市化と田舎感覚で、観光と製造で暮らそうというのだ。
　マオの叔父は、この事実を予測しており、マオに徳島をすすめたのも、都市のあり方への疑問と布石といえるだろう。
　また、吉野川に東環状大橋がかかって、神戸から一本道で徳島の中心部にアクセスができるようになったし、徳島環状線も完成している。
　マオの住む応神町や川内あたりは、企業が工場やオフィスを構えて、ずいぶんひらけて、藍住町（ベッドタウン）に続いて中心部の人間が、わざわざ郊外に買い物に出かけるようになるのだから皮肉なものだ。

　この時のマオは二十九歳。結婚願望はないが、子供はほしいと思っている。しかし、出産は怖いので、一路を可愛がってよしとしていた。
　一路、五歳。可愛いさかりだ。男児は母親に似るというが、なるほど、髪質や顔立ちは、明美とそっくりで、足の親指が内側に少し沿っている。見たことはないが、逆算すると、おそらく明美もそうだろうと思うとマオには笑えた。
　先にも書いたが、パズルが得意で絵も達者なのであるが、字が下手くそなところがマオには子供らしくて良いと思った。
「硬筆を習え」
　と明美には言われるが、
「ヘタでなんぼ」
　がマオの方針だから、ときどき、明美とぶつかった。これは、年々、エスカレートしていくのであるが、この程度は喧嘩の範疇ではなかった。ところがそこへ、マオのケツハラが付いてくるから、明美は往々にしてムッとなるのだ。
　ケツハラとは、血液型ハラスメントの略で、血液型で人間の性格を決めつけ、
「だから〇〇型は！」
　というふうに責めの材料に使うことをいう。どうでもいい設定であるが、マオはB型で明美はA型である。
　なるほど、おおざっぱでちゃらんぽらんなマオと、いちいちが細かく神経質な明美とは、性格分類でいうならば合うはずがない。

　第一次戦争は、幾美が熱を出したといって、明美が一路の運動会に参加してやらなかったことで勃発する。
　バツの悪いことに、大塚は上司と神戸まで出かけてしまった。そこでも、帰ってこい、来なくていいのつば競り合いで、
「幾美は私が看る」

　と、マオがかってでても、明美は看病を譲らなかった。
「仕方がないーー」
　マオは盛大に一路を応援して、必死に母親を演じた。が、ビデオを撮っていないという理由から喧嘩となる。しかも、急なことだったので弁当を作っておらず、
「愛国弁当だ」
　と、マオは日の丸弁当にコンビニで買った惣菜を付けて昼食とした。これも、明美の母親としてのプライドを傷つけるのか、怒りの材料になるらしい。
「なんで（一路を）撮ってくれなかったのよ！」
「応援で忙しかったんだよ・・・」
「それでも普通、撮るわよ」
「と・ら・な・い！　みんなそうだよ」
「『みんな』って誰のことよ！」
「『普通』ってどういう状態なんだよ！」
　女が口論になると、たいてい、こうなる。この場合、お互い、表現のフェルミ推定が気に入らなかった。
「記録より、大事なのはちゃんと見てやることでしょ？　文句があるなら、お姉が行けばよかったんだ」
「幾美が熱出したんだから、しょうがないじゃない・・・」
「だから、私が看るっつったでしょ」
「心配で、放ってはいけないでしょ！」
「わかるさ。でも、一路は？　軽い熱だよ。たまには病気して治癒力つけなきゃいけないんだ。それくらいで、死にゃあしないよ」
「他人事だと思って！　娘の心配してなにが気に入らないの？」
「だったら一路は？　心配じゃないの？　かーちゃんいなくて、かわいそうだよ・・・」
「・・・・・・」
　しばらく、時間が止まったような感覚だった。その感覚の中で、お互い、どういう思考を巡らせたのだろうか。
（良いことだろうか・・・）
　と、そこへ、実は携帯で一路の入場行進を録画していたことを思い出したが、口論になった以上、引くに引けず、意地でも、
（見せてやるもんか！）
　と、マオは思った。同時に、
（この辺で謝るか・・・）
　という気持ちにもなっている。
　しかし、決定打を明美は打ってしまった。
「だったら、あんたが（一路）育てればいいじゃない」
　マオは一体、この目の前の女が、何をいっているのか、その思考回路がわからなかった。

　わからないから、妙に感情が逆立ってきて、一発、明美の頬でも引っ叩炊いてやらないとわからないのではないか、また自分も気が済まないのではないかと思った。
「やらずに後悔するよりも、やってから後悔しろーー」
　昔、叔父におそわった。おしえに添えば、マオは明美をぶつだろう。とはいえ、横で一路が二人を見ている。マオは一路の顔を見ると、不完全燃焼ながら、すっと怒りが静まっていく自分に気づいた。
「わかった・・・。撮り忘れてごめん」
　明美は、複雑な思いでむしゃくしゃしていた。

　衝突は不発に終わった。ただ明美もこたえたのか、一路の行事はできるだけこなすように務めたし、愛情の判官贔屓（弱い方を味方）も改めた。
　いつだったか、
「お兄ちゃんなんだからーー」
　我慢しなさい。と、一路に言い聞かせたことがある。しかしマオは、
「兄ちゃんだから、ガマンできないんだよ！　ボンのメンツもーー」
　考えろ、というのが、未婚ながらの教育方針のようで、その方針は、周回遅れで明美の胸に響いた。
　しかし、なんとはなしにマオと距離があいてしまったのは事実のようで、マオも、頻繁には大塚家には運ばなかった。
　その間、マオはいつものように一路を迎えにいき、店で遊ばせて七時がきたら送ってやるというものだったが、一路は来年、小学生になる。自宅から数分の学校で、送迎女も用なしだ。
　まだ時間はあるが、いまから心に穴が空きそうな感じがしていた。
（何か、見つけないと・・・）
　そう思った。
　矢先、結婚したいと男に言われた。付き合っていたわけではない。ただの常連客の学生である。
（何を冗談を・・・）
　しかし、大学生は本気のようで、
「子連れでもいい・・・」
　と、マヌケなことに、一路がマオの子供であると信じ込んでいる。一路とも面識があり、告白してしまった以上、自分はその気のようで、あたかも、一路の父親のような包容力を、この男児の前で開花させようと必死に務めた。
「一路くん、何かほしいもんあるか？」
「ない」
「ほんなこと言わんと、なぁ、あるやろ？」
「ほな、『塩コンブ』がほしい」
「ほんなんでいいん？」

「うん。『塩コンブ』って高いんやろ？」
　何を言っているのか？
　という表情で、この大学生はキョトンとしていた。真相は、塩分が高いから、
「食べるな」
　という明美独特の食育であり、そこへ、マオの方針を聞きかじって、
「高いから買えない・・・」
　とでも言い包めたのであろう。
　一方で大学生は、優等生なのか、久々の難問をつきつけられて、あたふたする自分を隠して、ただの「お遊び」に真顔で接した。
　マオは、そんな青二才を見ているとバカバカしい気持ちになってきて、からかってやりたくなっている。
「ボーイフレンドでいい？」
　ただ、振り返ってみると、この選択は間違いだったかもしれない。男は、店の手伝いをよくしてくれたが、その光景が、常連客を遠ざけてしまい、あっという間に食えなくなった。それだけ、学生に依存していた経営だったということであるが、不均衡の是正には、
「よかったかもしれない」
　と叔父はいう。
　ボーイフレンドは大学院生。まだまだ、金になるには時がいる。
　マオはもうじき三十である。若いという自覚はあるが、これが、結婚でもしていて、多少肉置きづいた三十路の色気ならば世間に需要はあるだろう。だが、どうやっても太らないスリムな体型のまま、独り身を貫いているという状態に精神的な欠陥が見え隠れしていそうで、昔、さんざん明美をからかった三十路に、自分がなってしまうことが信じがたいと毎日思った。
　が、あっという間に、三十路に突入して、いつしか、三十二歳になっている。
　明美、三十九歳。一路、八歳。幾美、三歳。
　えてして、月日の流れは残酷だ。

「何が“幸せにする”だ・・・」
　ボーイフレンドとは別れてしまった。店は閉めてエンジニアに戻った。また、根暗なノマドワーカーも精神衛生上よくないので、ドーナツ屋でアルバイトをして細々と暮らした。
「それも人生だ」
　と叔父は言う。
「それもそうだ」
　とマオも言う。しかし、流されている感じがしている。
　いつ、誤ったのか。かつては自分の意志で生きていたのに、いまは、何かの意思によって運動している。
　それは、なにか。わからない。いや、心の奥では知っている。ただ、それを具体化すると、意思とのバランスが崩れるような気を起こして、明確に、自分に対して向き合わなかった世代が、三十路のマオをいえるだろう。
　ドーナツ屋の仕事は苦ではなかった。もともと、マオはなんでもこなし、職業のレッテル感覚をもっていないし、同僚に高校生や八十間際のジジババがいて、特に、三十路のマオが制服を着ていても不自然な感じはほとんどない。むしろ、そういう同僚たちとメールを交換したり、仕事終わりに食事に行ったりしている自分の自由さ、心の大きさが愉快であったりもしていた。
　いつだったか、それらのメンバーでカラオケに行ったとき、家族と間違われて、全員で笑い転げた。
　チュロスの作り方を初めておぼえた。マオは、この細長い硬い菓子を見ていると、しばしば、徳島に移住して間もない頃を思い出す。
「とりあえず、コレ・・・」
　指差しながら店員に言う。
　知らない土地での全国共通の娯楽は映画しかない。幸い、マオの自宅から映画館が近かったので、一路を送ったあと、レイトショーなどをチュロスを齧りながらよく見たものだ。
　映画ならなんでもいいから、恋愛、任侠、アニメにポルノ一一、この生地を伸ばしていると、不思議なほど鮮明に内容が思い出された。
（一路も食べるかな・・・）
　そう、ふと思った。
　すると、人の巡りとはおもしろいもので、何年ぶりだろう、少し成長した一路が幾美であろう小さな女の子の手を引いて、マオの店に現れた。
　とはいえ、二人だけで来ている。
「一路！　どうしたの？　かーちゃんは？」
「あとで行くけん、先に行っとけって」
　そう言うや、一丁前にもポケットに手を突っ込み、財布でも取り出そうとしている仕草が少し微笑ましく、マオは成長した一路をポカンとどことなく見ていた。
　小学二年になっている。なるほど、一年ぺえぺえではない顔つきをしている。兄の顔もしっかりしている。

マオは、何か話さないといけないと思ったが、一路の成長にみとれて、不思議と言葉が出なかった。ただ、二人の子供をずっと見ていた。
すると、明美が遅れてやってきた。
少し、肉がついたような感じである。しかし、太ったというよりも、持ち前の胸がますます実って、周囲が気を使うような雰囲気すら醸し出している。
（一体、どうすれば、（胸が）そんなになるんだ・・・）
マオは、久方の再開に、そんなことをとっさに思った。明美もすぐにマオだと気づいた。
マオは、少し気まずかったが、一言物申さないと分が悪いようで――、
「子供二人であぶないでしょ！」
明美は、もっともらしくも、マオらしくない発言であることに驚いた表情で口を開いた。
「この子（一路）、小学二年よ。何でもやらせろがあんたの口癖でしょ」
そういうと、明美は二カッと笑い、かつての関係にすんなり戻った。

一年ほど経った。マオ、かろうじて三十二歳。おばさんだという自覚はあるが、見てくれは二十代だと学生には言われる。
ウエストに余分な肉はないし、二の腕もキュッと引き締まり、顔も小さい。あいかわらずのBカップを除けば、
「なんてきれいな――」
三十路生活だろうと思っている。

　ドーナツ屋は半年前に辞めてしまった。かわりに、自分でドーナツ屋をはじめてしまった。
「楽しい」
　と、叔父にいうと、
「おもしろそうだ」
　とやらせてくれた。
　実に、あまい叔父である。それは、戦略なのか、マオのように、現状に自分を放りこんでみるという方針なのか、ランチェスター的なことは心得ているが、こういうところが、マオの叔父であるようだ。
　ひとつ、重要視したのは、年齢層の広い店にすることで、とりわけ、子供に社交をおしえる場であってほしいというマオの考えが気に入った。
　どういうことかというと、百円のドーナツを大人に混じって、洒落たカフェで食べさせるというもので、ジュースとセットで三百円である。
　話はさかのぼるが、幼い頃、マオはテキ屋のどんどん焼きが好きで週に一度は訪れた。
　マオは決して貧乏な子供ではなかったが、小遣いは一日百円である。どんどん焼きは二百五十円。
　少々、高いと思った。しかし、ほしいものを我慢して買うどんどん焼きの味は、今でも忘れることがないようだ。
　山形からきたという店主は、いつもまけてやると言ったが、マオはかたくなに断った。
　やせ我慢とは違う。
　あの頃感じたことは、背伸びしてものを買うことの子供なりのステイタスで、少しだけマオを大人に近づけた思い出だ。
　どんどん焼きではないが、それと同じ感覚を小学生にも味わわせてやろうというもので、三百円を握りしめてやってきた子供には、とびきりのサービスをして大人の扱いをしてやろうと、マオはつくづく思うのである。
　残念なことに、全国的に、駄菓子屋の廃業ラッシュが相次ぎ、子供の社交の場がない。
　近頃の親は、そういう場を毛嫌いしがちであるが、金銭感覚や少々汚れた手でお菓子を食べても病気ひとつしない免疫力をつける場でなければならない。
　それが、過保護に包装されたバーコード付きのお菓子を「使い過ぎ防止」と電子マネーでシャリン！　では、まことに味気ないのである。
　マオにしてみれば、金の使い道は子供が決めるのだから、貯めこもうが、宵越しの銭になろうが、子供の勝手である。
　とはいえ、駄菓子屋は恐ろしく道楽の世界で、食い扶持を稼げる補償もないから、先にも書いたように、いま風のどんどん焼き屋を選んだ。
　そんな思惑とは裏腹に、常連は大学生と年寄りに落ちついてしまったが、ときおり、小学生の女の子が二三人でやってきて、
「※さおしかもどきセットください」※さおしかという高級菓子に食感を似せたドーナツ。
　と注文されようものなら、
（こいつらみたいなのが、わけのわかった大人になるんだ・・・）

マオは密かに喜んだ。

二〇二〇年になっている。
徳島も州都らしく、少しづつ人口が増えてきた。増えてきたから、住宅が必要になるが、眉山という市民のセンチメンタルマウンテンが条例で高さ制限を課している。おのずと、高層マンションは建てられないが、金融と市場原理が働くと、東京のように空中権取引が横行していた。
空中権とは、高さ制限の枠を売買するものであるが、これには弊害がある。景観を一方面からしか捉えなかった。すると、徳島では、眉山の裏側にあたる、八万、しらさぎ台あたりに超高層マンションができあがり、街中からの景色は、ビルが眉山を見下ろすかのようになってしまった。
徳島駅は車両基地の移転とともに、北ヤードが再開発されて、あれこれ作ったが、結局、鉄道の路線が現在の需要からかけはなれており、たいして便利でもないターミナルになっていた。
一見すると、大阪梅田のような構造をしている。こういうところに、大阪に憧れる徳島の感覚が如実に出ている。
いまも走るディーゼル車こそ、燃料電池車に置き換わったが、パンタグラフに憧れる市民としては、
「音が静かになった」
という程度のものでしかなかった。
後に予算節約のためか、ジェットコースターのような都市型交通のエコライドが敷かれる。

さて、三十二歳のマオである。店は細々と順調なので、そろそろ、本気で、
「結婚しないのか」
と、さんざん明美に言われているが、その気がないのだから仕方がない。二言目には、
「代わりに産んどいて」
が常套句であるが、その一年後、本当に産んでしまって第三子。
（よくやるわ・・・）
マオは、この四十（三十九歳）の女をあきれて見ている。
男。太一（たいち）と名付けた。父親似。赤ん坊とどこが似ているかを見極め論ずるのは、ただの親バカでしかないが、当の大塚は、いちいち似ているところを上げていき、あまりにも似ているので、
「見ちゃいられんーー」
などと、室生犀星（むろうさいせい）のようなことを言ったが、成長するにあたって、見事に期待を裏切った。
似ているのは、髪が焦げ茶というだけだ。
されど、大塚家のネーミングセンスはよしとしている。
一路や幾美の同級生には、
「心杏（ここあ）ちゃん」
「空快（すかい）くん」
などと変わった名前はさほど珍しくもなく、ひどいものでは、

「泡姫（ありえる）ちゃん」
「地球（あーす）くん」
「香菜里亜（かなりあ）ちゃん」
「救世主（めしあ）くん」
　と、親の程度の知れるキラキラネーム、「美国」と書いて、アメリカちゃん・・・。
　うちの（大塚家）子供は、
（まともでよかった・・・）
　とマオは思っている。
「太一はやめて、一太郎にすれば？」
「ワープロか！」
「じゃあ、英人っくん（エイトックといいたい）は？」
「変換機能か！」
「もう、ホント、あんたたちのかーちゃんは贅沢だねぇ。ね、三四郎、花子・・・」
「あんたねぇ・・・」
　明美は、そんなマオをあきれて見ていた。さらにあきれるのは、三四郎や花子と呼んでおいて、翌日には、エクセルだのパワーポイントだのと呼ぶのである。
「ワード（一路のこと）、ワードく～ん！　お菓子買ったげるから、コンビニ付いてきて～」

　明美が四十になってしまった。ということは、一路は九歳なっている。
　小学三年。
　一路は、三年生が、
「嬉しい！」
　という。
　何が嬉しいのか。
　妙な制度かもしれないが、一路の通う小学校では、小学三年になるまでは、外で自転車に乗ってはいけないという決まりがある。
　経緯をいえば、単に車が多くて危ないというだけであるが、大塚家の暮らす常三島、助任（すけとう）という地区は、大きな道路が交差し、店舗や住宅も密集して、人の流れはひときわ多く、徳島といえども、一路はシティボーイに育ちつつある。
　それを、学校は、
「危ない」
　というのだ。しかも、ご大層なことに、
「自転車検定」
　なるものを実施し、合格すると、自転車免許がもらえる。裏返すと、〇年〇組・大塚一路と書いてある。
「更新はどこでするんだ？」
　マオにしてみれば、その学年の線引きはどういう根拠であるのか府に落ちなかったが、一路にとっては、街中を自転車で走り回れるのは念願だ。
　この小学生は、幼稚園のころから補助輪を外すことに熱心で、よく吉野川の河川敷グランドで

、マオは一路を起こしたものだ。
　それが今日からは、自由なのだ。内心、マオは心配していたが、当の親は、
「よかった、よかった」
　と、すんなり認めた。

　ひとつ、事件があった。
　五月の連休もおわった、普通の土曜の昼下がり。一路がマオの店にやってきた。
　マオは、明美も一緒であろうと思ったが、一人で来た、と、この男はいう。
「うそ！」
「ほんま」
　大塚家から、マオの店までは五キロあまりの道である。五キロなど大したことはないように思えるが、なにぶん、小学生である。途中、吉野川橋という長く、車の多い橋がある。
　そこから、土手や住宅地を通ってやってきた。
「よくきたね」
　と、いいたいところであったが、一路がここにやってくるまでの冒険の過程を想像してヒヤリとしていた。昔は、なんでもやれがモットーで、一路が怪我をしようが迷子になろうが、経験であると寛大だった。
　それが、いま、なぜ、こんなにも目の前の少年のことが心配なのか。
（こんな場所（川の向こう）に住む自分が・・・）
　悪いとすら思った。同時に、
（（一路と自転車を乗せるため）車も買わなきゃ・・・）
　と、ふと決めた。
　三十路を超えて、マオは少し、明美の感覚が理解できるような、妙な土台ができていた。
　しかも、一路は父親からもらったくたびれた小銭入れから三百円をとりだして、
「ドーナツ売って」
　と真顔でいう。他の子供には、社会勉強だから、金はちゃんともらった。一路からとろうとは思わなかったが、この男は、一丁前に自転車で店にきて、オーダーを通そうとしている。首からは、例の免許を下げている・・・。
「消費税足らんのん？」
　マオは、その行動のいちいちに、いじらしさを感じた。
　なぜ、そう思ったのか。
　一路の成長が自分から遠ざかっていくような感覚を持って、残酷にも、いまこの瞬間にも進んでいる気味の悪い喜びが、マオの中で駆けずり回っているのだろう。
「店長、はよう、ドーナツあげて」
「・・・・・・」
「店長～」
　そう呼ばれて、マオの中の何かが変わった。
「まいど、ドーナツ一丁。一路、今日から、店長じゃなくて、マオちゃんと呼びなよ！　いい？

わかった？」
「うん、わかった」
「あんたは、ええ子だ」
それきり、一路は一人で会いに来た。

二〇二一年。
州都といえども、徳島はあいかわらずのほほんとした街であったが、この頃になると、関西企業の徳島シフトと、偽装農家の土地あまり、防災対策も相まって、川内地区一体は、大規模な再開発となっている。
順序をいえば、もともと土地の低い川内の住人が、南海地震に怯えて、
「ハコモノでもなんでもええ」
と、高層の避難所を州に要望、避難所だけももったいないので、普段は複合商業施設を作った。付随して、農地法の改正で補助金付き大規模家庭菜園の兼業農家は、農地を企業に手放し、あっという間に、ひとつの街が出来上がりつつある。
眉山から遠いから、高さ制限もない。
「なんじゃこれは・・・」
横浜育ちのマオも目を見張るほどの巨大なビルが立ち始め、そこに鉄道が敷かれるというのだから、田舎の急速な発展は、ガーシェンクロン（遅れたものほど、新しい技術が適応される）といえるだろう。
言うなれば、ペントアップデマンド（抑制された需要）の開放に似たようなもので、それは、金の使い道を知らず、グローバリズムに敗れた地元金融に変わって、領土的野心旺盛な外資に裏付けられた関西企業の植民地として、公務員を廃した結果かもしれない。
なんと左に傾いた都市論だろうか？
これは、フィクションであるから、調子にのって想像すると、この時代は、国に潰させてもらえなかった航空会社がJRに買収されて、空と陸が一体になる。一体運営になったので、僻地の空港にも鉄道を敷いて、利用客の促進がなされた。
徳島も例外ではなく、徳島市と鳴門市の中間に位置する空港から鉄道を鳴門を終着として延ばしていき、先にも述べた川内、北島、吉野川を挟んで沖洲、常三島、その他もろもろ、駅を作って、徳島駅北ヤードに接続していた。
この物語は、都市論が主題ではないので、さらりと述べて終わりたい。

さておき、気を抜くと、どんどん徳島が変貌していく。このままでは、いずれ開発の触手が応神町あたりにまでも伸びてきて、マオの店も、都会的なものに飲み込まれるか立ち退きにあうか、時間の問題といえるだろう。
店周辺には、歯抜けのように田んぼがいくつかやっている。夏には、一路と用水路に出かけて、亀だのザリガニだの捕まえて遊んだものだ。
水路のわきからは、遠くに建設中の巨大なビルが見えていて、妙な光景だとマオは思った。
「そいつ、なに亀？」
「クサガメ。ほんなら、これ知っとる？」

「知ってるさ。ミドリガメでしょ」
「ブブーッ。正解は、ミシシッピアカミミガメ」
「なんじゃそれ！？　この「人」はミドリガメでいいの！」
「あかんよ、ちゃんと覚えたらな」
「一路、世の中ぁ、デファクトスタンダードの方が大事なんだよ」
「ほうなん？」
「そうだよ。じゃあ、これはーー」
　イシガメであると一路は言った。トクシマボーイだからか、単に賢いだけなのか、生き物の名前にやたらに詳しい。
　一路は、捕まえた亀を並べたり重ねたりして、時間を忘れてマオと遊んだ。
　マオは浜っ子といえども緑区の端っこ育ちで、田んぼや用水路は、こどもの頃は手のものだった。いま、こうやって、一路と用水路で遊んでいることが、不思議な感覚であり、平凡であるが幸せだった。
「マオちゃん、タートルズって知っとる？」
「知ってるよ。衛星で見てたからね」
「衛星ってなに？」
「BSのこと。テレビのやつ。昔はそういってたの」
「メトロと営団との違い？」
「あんた、いくつよ・・・」
「あれな、タートルズってな、足がヒレでないのに、タートルズっていうん、おかしい」
「何で？」
「ほなって、指あるんやし、陸ガメでないとあかんやん。ほんまは、『トータスズ』が正しいと思うんよ」
「指がないと、武器もって戦えないからじゃない？」
「ほうなんかなぁ」
　一路は、まれに、するどいことをさらりという。英才教育は施されていないが、こういう部分を伸ばしてやれば、本当に大物になるのではないかとマオは密かに思うのである。
　マオは釣りガールに転身してからというものの、一路にはあれこれ手ほどきしてやったが、新町川で得体のしれない魚を釣ったとき、
「チチンボや・・・」
　と肩を落とした一路は、惚れ惚れするほど利口に映った。
（おばバカだろうか・・・）
　おそらくそうに違いなかった。

　一年経った。
　マオは三十四歳になってしまった。大塚家の子供たちは、上から、十歳、五歳、一歳。
　何の法則かはしれないが、あと四年もしたら、もう一人できるのではないかと思ったりしている。
　明美、四十一。そこそこの暮らしをしているのか、それほど外見は老けて見えない。大塚も忙

しさにかまけているうちに、じわじわと出世しているのか、一家愛用のカローラがアウディになり、七千円の革靴が、
「これ、二万円もしたんですわ」
　と、すっかり阿波弁になれた口調で自慢する。一路は一人遊び専門、幾美は太一が生まれて姉に目覚め、母親よりも母親であるという、絵に描いたようなファミリーで、服装も同じような趣味を選ぶから、
（コムサデモードかよ・・・）
　包括的なイメージとして、マオの目には映るらしい。
「アカン！　そんなんではアカンよ！　旦那！」
　もっとも、大塚が出世するには、
「女遊びの一つや二つや三つや四つーー」
　やらないと駄目だとマオは言う。
　明美は、定時に帰っては子供と遊ぶハーモニカ男にそのような甲斐性などあるわけがないと思っている。とはいえ、製薬業界の規制から、接待と付き合いがグレーゾーンのままに法制化されてしまい、帰ってくるより他はない。
　しかし、それに強制力はない。が、本当に甲斐性がないのか、大塚は定年(早期退職)まで勤め上げたが、結果、部長どまりの人生である。
　人当たりはいいが、輝くものがなにもない。女にはモテないので明美は安心かもしれないが、子供の相手をしてやるにも、結果、子供たちに遊んでもらっているという状態で、父親としては頼りなく、買い物の運転手くらいにしか役に立たない。
　食事の後は自分から片付けるし、ゴミ出しも平気でやっている。
「ええご主人やねぇ」
　と、同じマンションの住人に言われても、聞いているマオは、あたかも自分が妻であるかのように顔から火を吹き落ち込んだ。
　そんなことは、夫にやらせるものではないと思っていて、男とは、どっしりかまえて、帰ったら、
「飯、風呂、寝る」
　で十分だ。
　いくら、大塚が草食系の生き残りとはいえ、あまり、男女平等をおしつけると、見るも無残なフヌケである。このようなフヌケの背中をみせつけられると、一路も、一見、手のかからない優しい男になるかもしれないが、マオとしては、がっかりな性格と言えるだろう。
　マオの理想はこうである。
　まずは、基本家庭は亭主関白とする。明美が文句の一つでも言おうものなら、すかさず一発二発引っぱたいてやる。子供たちも、幾美が弟のめんどうをしっかり見て、兄への気遣いも忘れない。
　一家の男どもは、そんな女のやさしさを言葉に出さずに感謝する。そういう構図が理想なのである。
　とはいえ、しょせん他人の家庭のことである。マオがとやかくいうことではないが、希望的観

測として、いつも不満に思うのだ。
(だから“かかあ天下”は、男を小物にするんだ・・・)
「幾ちゃん、幾ちゃん」
　と、一路は幾美を呼んでいる。こういうところでも、フヌケのカケラが見えていて、
「一路、あんた、兄ちゃんでしょ。幾美は『幾美』でいいの。妹の分際でぇーってくらいでいいの、わかった。もっと、偉そうにしなさい」
　とかく、マオは、これくらいの抵抗しかできないでいる。

　さて、この辺で少し、徳島の変遷にふれておきたい。
　先にも述べたが、徳島が州都になったと同時に、建ぺい率と容積率が緩和され、徳島市中心部では、眉山という山から一定の距離をおけば、高層ビルも許可された。それが、中心部から見ると、マオの住む吉野川の向こう側であり、歳月は、街の中心をクレーターのごとく遠くから見下ろすという形にさせていく。
　つくづく不思議な地形であるが――、なぜ、都心の中に山が二つ（眉山と城山）もあり、それらに挟まれるようにして、わざわざ、三角州の上に街を形成していったのだろうか。
　歴史と風土と言ってしまえば、おしまいであるが、後の『ひょうたんアイランド（徳島駅周辺）』となる一等地の正体は、巨大な中洲のなかにあり、むろん、橋が数多くあり、地形としては面白い。面白いがゆえに、いじりにくく、この街の発展を遅らせたのも事実であった。
　主題としてあまり重要ではないので軽く流すが、徳島駅から東へ七キロほどいったところに、沖州（おきのす）というところがある。そこには、卸売市場や浄化センターなどがあるのであるが、例えば、ここに州都機能を集積し、マンハッタン島のように街を作るのはどうだろう。
　もしくは、臨海部なので、神戸のポートアイランドのように、研究機関や大学、病院を誘致するのもいいかもしれない。それには、沿岸部には、巨大な防波堤を気づき、行政の中枢が率先して活用することが望ましい。そして、沿岸部の住人を旧市街地へ移住させて、津波対策も引き受ける。
　先にも述べたが、この街の中心地は巨大な中洲にある。現実的にメリットはないが、万が一、周辺の橋を落とされようものなら、都市の機能は一瞬で死ぬという、テロにはうってつけの地形である。水都といえば聞こえはいいが、ブリッジリスクも街が大きくなるにつれて考えなければならない。
　そのため、州都機能を臨海部に移せと書いておきたい。
　暴走すると、さらに沖州を埋め立てて行き、そこへ空港を作り、（空港のある）松茂町を徳島市と鳴門市の完全なるベッドタウンとして生き残る道もあるかもしれない。
　とにかく、元都会であった城下町の街並みは、都会化するうえでは、合理的ではないようだ。

　――閑話休題。

　少し、時空を飛び越えたい。といっても、なにも、この現実臭い物語にSF要素を放り込もうとしているのではなく、プロセスの断片を切り取って、大塚家の成長を笑いたい。
　例えば、三年経って、二〇二五年。
　一路は中学生になっている。幾美、小学二年。太一が四歳で幼稚園に入った。一路は大人しい子で、幾美は甘ったれのお姉さん、そして、誰に似たのか、太一はやんちゃでがちゃがちゃだった。
　がちゃがちゃというのは、レバーを回してカプセルが出てくることではなく、とにかく見てい

て気持ちのいいほどの悪ガキで、親の言うことはまったくきかない。しかし、当の親は、子育てのわけがわかっているので、太一の悪さがコミカルで嬉しいのか、真剣に叱ることはないようだ。
「こら！　そこのチチタップン！　聞こえんのか！　チチタップン！」
「なーに、それ？」
　明美は、発泡スチロールでできた妙なヘルメットをかぶり、ラップの芯をセロハンテープで繋ぎ合わせたものを喜ぶ息子の相手を、家事の片手間やっている。昔は、
「かーさん、かーさん」
　と、何をするときも明美の足にしがみついていたのに、四歳にもなると、ラップソードで尻をぺしぺし叩かれた。
「やめぬか！　小僧！」
「うるさい！　とつぜんへんしん（突然変異といいたい）、パヨタップン！　悔しかったらおっぱい見せろ！」
　何が悔しいのかわからなかったが、明美は瞬時に、自分のあだ名だとわかった。
「誰がそんなこと言ってるの？！」
「班長（マオのこと）が言よんや！　はよう、見せろ！」
　太一も、マオの手下であるらしい。なにぶん、明美は家ガール、アウトドアはマオにアウトソーシングしていて、その影響は、結果、自分に降りかかった。
　家ガールなどというと聞こえはいいが、単なる出不精なだけである。女が四十を回ると、化粧は念入りにしなければならないし、事故やら予期せぬアバンチュールに備えて、下着も小奇麗にしなければならないという強迫観念がめんどくさいのだ。
　いつだったか、接骨院でズボンを下ろされたとき、パンツのゴムが緩んでいて死ぬほど恥ずかしい目にあった。
　以来、そういうことが気になるのだ。
「そんなの、お風呂で見ればいいでしょ」
「いやや！　お風呂はパパと入るんや！」
「パパは今日、遅いの」
「ほな、風呂入らん」
「この、わからんちんが！　ほんま、どうして、この子は、もうぉ～」
　なんといってよいのか、このように、明美は太一の悪さが好きらしい。

　マオも、太一を手懐けるまでには苦労している。
　太一が泊まりにくると、ジュースはこぼす、ご飯はこぼす、素っ裸で部屋を走りまわって、開けられるものは全て開け、引っ掻き回して、しかも、当の本人は目的もない。風呂に入れてやると、乳が小さいと真顔でいうし、
「なんちゅう悪ガキ・・・」
　だろうと思った。

　しかし、しょせんは子供である。子供は案外、「権力」には弱いもので、とりわけ、警察と法律にはすんなり従う。
　悪いことをすると、
「被害届出して逮捕してもらうぞ」
　とか、夕食にハンバーグばかりせがむと、
「法律でハンバーグは月に一回しか食べてはいけないことになっている。ちなみに、カップ麺は絶対禁止だ。守らなければ罰金五十万円で懲役二年――」
　などと、マオも真顔で太一を脅した。
　すると、どういうことだろう、日本の男児は統制や規律が身を持って備わっているのか、ちゃんとおしえると、ちゃんと従う。
　しかも、ふざけて、
「班長と呼べ」
　というと、本当に呼ぶのだから、一路とは違った可愛さがある。中学になると少々荒れたが、マオには絶対服従だった。
　このような悪ガキでも、成人すると、不思議なほどいい男になっていて、手土産でももってマオのところに訪れようものならば、五十を過ぎた女でも、ドキッとするのだから、子供の成長は計り知れない。
　幾美は、甘ったれから内気に育ったが、十九歳で身ごもってしてしまい、五十五歳で、明美は、ばあさんになっている。
　一路はというと――、次回作にとっておきたい。

　では、二〇二二年に戻りたい。
　マオ、三十四歳の夏である。
　徳島の夏といえば、内気な市民を暴走させるイベント（阿波踊り）がある。この街では、お盆を中心に回っているから、夏休みは、さしずめクリスマスと正月のようなもので、学生も社会人も、何かにつけて、やれ、
「練習だ」
「連の集まりだ」
　とばかりにやっている。
　連というのは、おどりのグループのことを指す。これには、ゆるやかな統制が効いていて、普段はやんちゃな人間も連のお歴々にはなぜか従う。一見すると、厳しそうな気もするが、祇園山笠における「流（ながれ）」のような縦社会でもない。
　これは、似通った祭りと比較されがちなよさこいとは違って、よさこいはグループだから、実態、マナーはあまり良くない。その点、連は全員で監視され、人員を育てていくという伝統がある。
　おそらく、全体は部分の反映であり、部分が輝くには、全体がまともでなければないらないという、フラクタル理論のようなものが、風土と共に残っているのかもしれない。

徳島の子供は、こういう風土の産物を、カリキュラムとして幼い頃からおしえこまれる。
体育の授業にあるのだ。学習指導要領とはいえ、徳島の子供は、同じ二拍子でも囃子のリズムでやっている。文科省はなぜこのことに意義を唱えないのか不思議であるが、ヒップホップダンスよりかはマシだろう。この阿波流ダンスを、運動会をはじめ、発表会、宴会や結婚式にいたるまで、口実を作っては踊りまくった。
そういえば明美も妊婦の時、
「運動不足解消のため――」
阿波おどり体操を臨月までやらされた記憶があり、つくづく徳島は、
（どうかしている・・・）
と思うのである。
四月には、「はなはるフェスタ」というささやかな催しがあるのであるが、実態は、阿波踊り三昧で、お盆まで待てない阿呆のガス抜き祭りのようである。
その阿呆の一員に、一路を入れてみようと明美がいうのだ。大塚は、業務の一環として企業連に参加していて、一路も幼い頃からそれを見ている。そこへ、物事を基礎からやりたがる母親を持つと、
「本腰を入れて――、」
やらせてみようという発想になるのかもしれない。
一方で、祭りは、警察や自警団と化したその筋の人たちにより治安こそ守られているが、日に数十万もの人が溢れかえる中、子供を連れてうろうろするのは、ストレス以外、何ものでもない。
だから、「連」に放り込んで、所属の「法被」を着させることで、こどもの安全と、明美自身の開放をもたらす結果を、またもや、教育と結びつけて嬉しがる女がここにいた。
マオは、賛成半分、半分反対の気持ちできいていた。もちろん、明美の言うことは一理ある。しかし、阿波踊りのみてくれは、華やかで人を育てる躾の場であるように思われるが、内心、阿波踊りにおけるヒエラルキーという既得構造にマオは疑問をもっていたし、阿波踊りを口実にすると、仕事をほっぽり出して抜けることも正当化できると思っている、甘ちゃん社会人の多さに呆れてもいた。
このような、至上主義と化した精神カーニバルに一路を放りこみ、技術調和と躾は学べども、人生の優先順位が常に阿波踊りであるということに、息の詰まるような感覚もしていた。
「学校だけでいいじゃない」
と、マオが思うのは、そういう構造が気に入らないからだ。
マオは、明美ほどは偏屈ではない。ないが、筋が通らず、やり方が気に入らないことには、断固として反発してきた人生だ。
例えば、地元の新聞を絶対にとらないのは、いまだ日本で唯一の社団法人発行で、ブレまくるアソート記事を好むこの街の人間は、保守的なようで実態はリベラル思考がとにかく多い。
それは、教育委員会には批判的なくせに、その教育委員会管轄の新聞だけはなぜかとるという、統合失調症で足腰の弱い姿勢が証明している。マオに言わせれば、

「健全な批判的精神を――」
　個々人が自分なりに持ち合わせるべきだと考えており、右へならえの護送船団方式は、そろそろ卒業せねば、様々なものが壊れかねない。おかしなものに屈しては日本に生まれた価値もないし、その街に住む力量も問われかねない。
　踊りの達人がダメだとは言わない。仲間でわいわいと助けあうのも美しい。しかし、一部の至上主義的な思考感覚が、マオがもっとも嫌う、社会主義的な匂いがするから、素直にやれとはいえないのかもしれない。大塚でさえ、筋肉痛になりながら踊っているのは、家族のためだといえるだろう。
　それでも結果、一路は踊りを習い始める。
　夏休みはかきいれ時であるが、若い衆は踊りの練習でもしているのか、客は老人がぽつぽつ座っているのみ。
（うち（近所の）の大学にも、連があるんだっけ・・・）
　マオは、遠くで聴こえる鐘や笛の音をかき消すかのように、音楽のボリュームを少しあげた。
　ニコール・ヘンリーのサマータイムがかかっている。常連客には、
「ええ曲やなぁ」
　と選曲を褒められたが、アリシア・キーズに変えていた。

　さて、一路の阿波踊りデビューであるが、あれから一年経っている。始めたのが相対的に遅かったせいか、下手くそというわけではないが、どこかちぐはぐな感じでやっている。
　阿波踊りの基本理念として、

　――手を上げて　前に進めば　阿波踊り

　などという言葉があるが、おそらく、それは嘘だろう。そのとおりにやって許されるのは観光客くらいなもので、連に入ると、本当に分かって言っているのか、手の角度が何度であるとか、腰を何センチ落とせであるとか、いちいちうるさい。フォーメーションが合わないと、子供でも容赦なくどやされるわで、さしずめ、劇団のようだとマオは思った。
　明美は、そんな息子に付いてちょろちょろと連員の世話をやっていたが、内心、家族でほうぼう見て回るよりも、拠点で関係者ぶって祭りを遠巻きに眺めるほうが楽だと思った。
　一路は他に、少年野球のチームに進んで入ったが、五月を過ぎると、踊りの練習に野球そっちのけで駆りだされている姿をみて、
（ほら見たことか・・・）
　一路が気の毒な反面、マオは自分の考えの正確さが世の中を見る上でのバロメーターだと思った。

　近頃、太った外国人が店に来る。ドイツ人だという。マオのことが好きだという。
　日本語はあまり話せない。が、接近の口実なのか、日本語を教えてくれと片言でいう。

「話せてるじゃないか」
　というと、
「それしか知らない」
　といつも言う。とはいえ、日に日に、語彙（ごい）が増えてくるので、
（嘘だろう・・・）
　と思った。そんなことは、
「学校でやれ！」
　マオはいつも突っぱねた。しかし、そういうマオのそっけなさが、このドイツ人の心理的リアクタンスになって、なおのこと、マオに想いを募らせている。
　内心、マオのせいでもある。外国人が珍しくてちょっとサービスをしてやり、愛想よく話したし、叔父からもらったカウンター裏にあるデジタルサイネージには、

　善問者　如功堅木　先其易者　後其節目

　などと、毛筆体のこけおどしがチカチカしている。こけおどしだから、何も知らないドイツ人には、しごく高等なもののように見えている。とはいえ、マオも、よくは知らない。
　つまり、善く問う者は、堅木（けんぼく）を攻（おさ）むるが如し、其の易きを先にし、其の節目を後にす、ということで、要約すると、堅い木を木材にするためには、やりやすいところから先に手がけ、鉋（かんな）で削ったりして、節目など難しいところは、後回しにしろというのだ。
　いわば、細分化理論とでもいうのか、はたまた、明日出来ることは今日するなという持論なのか、定かではないが、自分のペースで小分けに働けというものだ。
　それが、日本のハイテク技術でパネルの中を動きまわり、おまけに世界五ヶ国語表示になるものならば、このドイツ人も感心してしまい、
「いい店だ！」
　と、単純にファンになるようだ。
　デュッセルドルフ出身、顔立ちはいいのだが、なにぶん太っているから、キリッとした目付きがマヌケに見えて、真剣に日本語を話そうとしているその所作が、いちいちおかしくてマオには笑えた。
　この男は、マオと少しでも長くいたいのか、品だしに二時間もかかる水出しコーヒーを毎日二杯も飲んで帰るし、会話が弾んだ次の日には、毎度、花束をもってやってきて、
「マオサン、マオサン」
　などと呼ばれれば、しつこさが熱心にかわろうとしていた。
（ドイツと組むのもいいだろう・・・）
　ふと、マオは思った。そして、アメリカの悪口をこの男としているうちに、ボーイフレンドにしてやった。
　初めは、年上だと思った。ひげ面でハゲかかり、腹が出ている。その姿は、漫画に出てきそう

なドイツ人の典型である。それが、マオより年下で三十二歳というのだから、何かの間違いではないか。横に明美を並べてみても、明らかに年上の夫でとおるかのような風貌なのだ。
　しかし、マオは気にしなかった。痩せれば男前だと信じていたし、裸の体操は強烈だった。毛むくじゃらで野性的ではあるが、一方で、マオの後ろをちょろちょろと大男が付いて回る光景は、はたから見ても滑稽である。
　また、この男は、マオの叔父の書く、史書の言葉が好きらしく、この日も、

　不遇盤根錯節　何以別利器乎
（盤根錯節に遇わざれば、何ぞもって、利器を別たんや）

　曲がった根（盤根）や入り組んだ節（錯節）などのような硬いものを切ってみなければ、刃物の値打ち、切れ味はわからないという意味で、処理の難しい出来事にぶつからなければ、人の価値は判断しようがない。苦難にあって初めて理解できるのだというアニメーションを、あたかも、えらい教祖の言葉であるかのようにうっとりしていた。
　一方で、マオは、そんなことよりも、このジャーマンピッグ（男のこと）の体重が増え続け、後で分かったが医者だというのに、定期健診で糖尿病と診断されたことが気がかりだった。同時に、この男の体を心配している自分が、保護者のようだと思った。
「もう！　なにこの腹！　妊娠してんの？」
　そうやって、いつも、からかって脅したが、幸せ太りに拍車がかかって、百キロを軽く超えてしまった。ダイエットに、夜中、二人でしばしば走った。
「目標はコスプレマラソンやー」※とくしまマラソンがコスプレに変わった
「はいっ」
「けど、ドラえもんはアカンよ。細いキャラで」
「ええっ！？」
「もし痩せられなかったら、シリアルシリアルプロテイン！」
　それなりに、
（幸せそうだ・・・）
　と周囲は見ていた。明美も、やっとマオも落ち着くのではないかと期待していたが、結婚だけはしなかった。

#「shiasatte」番外編（前編）_5

二〇二六年。マオ、三十八歳。ドイツの男は祖国に帰った。
（なにが、幸せにするだ・・・）
この女は、いつもそうやって男に別れを告げてきた。捨てたともいえる。いや、捨てさせる決断要因を男になすりつけて、不満がっているだけである。
卑怯というのかもしれない。男も自由もほしいのだ。それらの質量は、マオの中では、同等だ。であるならば、自由をいつも手に取るマオは、本当は、一人でもいいと頭の片隅では思っている。
マオは本来、「中立」などという立場などないと考えている。なぜなら、中立をよしとする人間は、物事を最後まで考え抜く力のないものだと思っている。それが、
「別れ」
という選択をいつも生む。結果論かもしれない。
マオの明美とは違う偏屈さは、インスピレーションの弊害である。IT系特有のゆがんだ認識かもしれないが、ヒューリスティックとでもいう印象管理をして、人間にスキーマの設定をする。しかし、ひとたびその管理からあぶれてしまうと、とたん興味がなくなってしまうという心の狭さももっている。
おそらく、父親がいないことの男へのコンプレックスが、汚いものを見ないようにしてきた。みる必要もないと思った。
これも、明美が近くにいるからだ。大塚家の子供たちは、マオを慕っているし、どういう慈愛か、マオも育ての母であるという自覚がある。自覚があるから、擬似的な息子娘であっても、そういう存在があるかぎり、真剣に、付き合いの延長線を思い描くことができない。
妙な喩えをすると、ペットがいるから旅行を自粛するかのような、そういう感覚を、いつもマオはもっている。
それが、マオの孤独感覚を麻痺させて、黙々と一人を貫かせた。
かつて冗談で、
「（自分の）代わりに産んで」
と明美にいつも言っていた。
結果、明美は三人もうけた。明美は、幾美が生まれたとき、もう二度とお産はしないと誓ったという。しかし、いつの間にか身ごもっていて、マオは、つくづく、この四十五歳が詩人のようだと思うのである。
エッカーマンもおよそ、同じことを言っている。ともすると、マオも同じ構造で詩人のようなものであると、周囲の人間もまた思っている。
ときとして、それもまた、面倒を見る子供が増えるたび、マオの心理的決済が固まっていく過程の醸成なのではなかろうか。
マオは、一人でも平気であったが、四十を手前に少しさみしいのは、何に対しての焦りだろうか。

「幾美にやろう・・・」
　そう思って買ったぬいぐるみが、マオの横でいつも寝ている。
　よく、分析したがわからなかった。

　この頃になると、マオは、酒とともに、タバコも飲むようになっている。
　現在、一箱千二百円。完全なる、金持ちの嗜好品である。それを、一日、二箱も吸うのだから、マオもいよいよ、人生の何かが見え始めた証拠かもしれない。
　さかのぼって考えてみると、かつて歩いた遍路から得たことは、「再考」とでもいえる作業への知的体力である。同時に、結願後に俗世から離れようと他人とは違うことをしていた自分は、高ぶったことをしていたのだと気づいた。
（徳島へ来たのはそうなのか・・・？）
　実生活を離れた思想などありえないし、しかし、実生活に犠牲を要求しないような思想は思想でもない。それは、小林秀雄も言っている。
　なるほど、世のたいそうなことは、昔から既に考えられているようだ。であっても、もう一度考えなおしてみる必要がある。
　なぜなら、モノというものは、現在のものでなければ、役に立たないからだとマオは思った。
　それが何か、形にする術を知らなかったが、
「不立文字（ふりゅうもんじ）である」(※真理は言葉にできない)
　という感覚だけは、一丁前に、わかった女のふりをした。
　味覚が衰えることは承知していたが、レストランというわけではないので吸うことにしたし、カフェの女店主がタバコの一本くわえていないと、絵にならないのではないか、と、イメージの中に自分を落し込み、落ち込んだ先で、変わっていく自分を正当化していた。
　休日は、廃盤のレコードをあさりに出かけ、デジタル変換しては、とりわけ、バーシアを好んで流した。
　ときおり、廃盤なのにJASRACから小言を言われた。
　それでも、無視し続けているうちに訴えられてしまい、くだらないことに呼び出し（裁判所）をくらった。
　罰金、五千円・・・。
　重ねて書くが、
（くだらない・・・）
　とマオは思ったが、のんきな地元テレビが報道したので、五千円以上の宣伝にはなったかもしれない。
「ハハハハハハッ」
　マオは失敗しても必ず笑うが、それは、前向きなのではなく、糊塗の要素が強かった。

　ところで、思春期の一路は、週末にもなると、マオの家にやってくる。
　単に会いにやってくるのなら嬉しいが、仲の良い親が嫌だといい、一緒に寝ているのが気持ち

悪いのだという、いわば、避難（非難）的要素をもってやってくるのが複雑だった。
（なるほど・・・）
　マオはすべてを察して一路を迎えた。いつだったか、マオは大塚家の夫婦を、
「アメリカンファミリーか！」
　とからかったことがある。仲がいいことは良いかもしれないが、子供の前で抱きついたり、明美の機嫌がいいときは、出かけにブチュッとリビングでやるのだから、思春期の一路にしてみれば虐待かもしれない。
　それは、太一の言動からしても察せる。

「かーさん、ふんどし（おそらくTバック）履いとる・・・」

　しかし、それでもよかった。この年頃は、やれゲームだのクラブだのと、友達を優先しがちである。それを、ことがあれば、わざわざ河をわたってやってくる。
　このさみしい女は、声が変わりだした少年が自分の息子のように思えて、いつまで年増になついてくれるのだろうと不安を混ぜて喜んだ。
「マオちゃん、おるー？」
「おるよー。よう来た！」
　ふと、（徳島に）馴染んでいる自分に気づいた。
　徳島で、十三年が経っていた。

　幾美はマオのことを、
「マオちゃん」
　と呼ぶ。
　小学三年であるが、よく泣く。勉強はできるようだが、百点しかとらないので、子供ながらのプレッシャーに負けて、
「百点とれんかったらどうしよう・・・」
　ふと見ると、宿題をしながら泣いているという性格だ。マオの場合、
「悪い点とったらどうしよう・・・」
　とでも不安がっているほうが子供らしい気がしているが、なんと皮肉な悩みだろうか。
　ほしい物をほしいと言わない。出来た子のようにみえるが、結果、親が不憫で与える。
　しかも、取り上げられるのが嫌で楽しそうにおもちゃで遊ばないかのような、それでいて、二番目に大事なものはいつも離さないという難しい子である。
（さみしいのかもしれない・・・）
　マオはつくづく思うのであるが、その原因がわからないから、幾美の思春期が何かの端境期ではないかと考えている。
「マオちゃん、怖い」
　幾美は、小さなハエトリグモを差して泣きわめいた。小さいといっても、小さすぎて、マオに

はまったくわからない。
　歳のせいもあるだろう。目を凝らして壁をよく見た。確かに、小さなソレが張り付いている。
「小さいからいいじゃない」
　そう言っても、
「小さいのが怖い」
　と、目を離すとわからなくなる、忍者のような不気味な感覚をずっと味わっていなければならない精神的な疲労が怖いのかもしれない。
　徳島で暮らし始めたとき、春先になると、ゾッとするような巨大なクモが天井に張り付いたりしていて、マオも恐怖の日々を味わったが、近頃は、開発のせいか、ゴキブリ以外、虫を家の中でみることが滅多になかった。
　それを見つけて、幾美が泣く。さすがに、大げさだろうとマオは思うが、この虫探知機を止めるには、部屋中ひっくり返してトドメを刺さないと治まりそうになかった。
　しかしどういうわけか、ムカデやヘビといった細長いものは平気らしく、太一と一緒に用水路へ連れていってやったとき、草の茂みからソレを素手で掴んで、太一の腕に巻いていた。
　太一は、めちゃくちゃに泣きわめいていたが、
「かわいい、かわいい」
　と、今度は、ヘビと太一をキスをさせたかと思うや、
「やっぱり可愛くない」
　のだと、ヘビを結んで放り投げるという子供特有の残酷さのオンパレードで、見ているマオも気が遠くなってぞっとしていた。
　いまでも、ふと、姉から抵抗できずに泣き叫ぶ太一の場面を夢に見ることがある。結果、太一は、この大人しい姉には、逆らえず、何をしでかすかわからない怖さを持っている。
　そういう子だったし、そういうふうに育った。
　発育はよかったが明美ほどでもなく、「D」で止まった。顔はキレイだが、可愛いの上限を超えていて、人気はあるが近づきがたいという、実に、残念な女である。作文が得意で、趣味で絵本などをよく描いた。が、シュールすぎて、大人は困った。

　例えば、

　きょう、コンビニに行って立ち読みをして店から出てくると、空にガイコツの上半身が浮かんでいて、よくみると、お腹の部分が赤く光っていました。
「なんだろう？」
　と思って目を凝らしていると、そのまま、ガイコツはロケットのように空高く飛んでいき見えなくなり、突然、黄色い雨が降ってきました。
　帰宅すると、頭の割れた総理大臣が座っていて、割れ目からカマキリの顔がのぞいていました。すると、「お助けマン」と名乗るトラの顔をした宇宙戦士がやってきて、二人は丁々発止になりました。

そこへ、兄がお茶を運んでくると、三人でなにやら、政治の話がはじまりました。

おわり。

少し、駆け足で時空を超えると、勉強はできたから、地元の医学部に進んだ。マオにしてみれば、
「この、おじくそ（怖がり）が――」
人の身体など見られるわけがないと思っている。
ところが、研修は楽しいという。不謹慎ではあるが、死体を見ただけで嘔吐する学生のなかで、平気で肉にメスを入れられる女が幾美である。
冗談で、
「献体してやる」
というと、真顔で、
「助かるわ」
という。
冗談だから笑ってごまかそうにも、幾美にいわれると、どうも本当臭い感じがして寒気がするのだ。新喜劇で未知やすえが、
「ドタマ（頭）すこーんと割って脳みそストローでチュウチュウしたろか？」
というおなじみのセリフも、幾美が言ったとすると、本当にやりかねない感じがするから、大塚家の中で、幾美は少し特別だった。
それでも根はやさしい。
動物が好きでハムスターやうさぎをよく飼った。世話はよくする。しかし、生き物、いつか死ぬ。死んだら気が狂ったように泣き叫び、それでも懲りずに、飼っては泣く、泣いては飼うの繰り返しで、金魚が死んでも泣くという心の作用をもっている。
繊細なのだ。もっとも、繊細すぎるし、手のかからない子だから、扱いの難しさから、親は、半ば逃げるように放置し、父親においては、娘に遠慮してか自分が創り出したことが信じられない美形だからか、娘に照れて、「さん付け」で呼ぶ。
「幾美さん、幾美さん」
と、いい年をしたおっさんが、自分の娘をそう呼ぶ。ある程度成長すると、一路や太一は呼び捨てなのにだ。そういう機微も、ささやかな差別と、この難しい娘には映るのかもしれない。
差別、というのは違うかもしれない。ただ、クラスメイトにもみられる、幾美への賛美が「憧れという名の差別」なのである。それを、親が、実の娘に緊張して、幾美が、
「パパ」
と話しかけようものならば、続きを話す前に、
「なんかほしいもんでも？　わかった、小遣いやな」
およそ、そのような具合である。そして、ほしいものは自動的に手に入り、何が必要で何がいらないのか、考える頭が育たなかった。

　だから、モノはすぐに捨てるし、
「もったいない」
　と言われても、
「運気が落ちる」
　と、風水や断捨離をもちだして、とにかく、身の回りに物を置かない潔癖だった。マオの家に遊びにきても、一言目には、
「片付けて」
「汚い」
　汚いから虫が来て、靴をたくさんもっているから、結婚できないのだと、妙な解説をして潔癖をマオに押し付けた。
　マオは奇っ怪な「姪っ子」をもつ自分が気の毒だと思ったが、振り返ってみれば、一番気の毒なのは太一である。
　長男だからか部屋数がないからか、まだ二人が幼かったからか、一路には一人部屋をやったのに、幾美と太一は同じである。
　怖いものなしの太一であったが、四つ上の姉には恐怖すらおぼえる。先にも述べたがヘビの一件や、彫刻刀を手のひらに落とされる、気に入りの消しゴムは意味もなく消費されるわで、このような精神的トラウマが太一が中学まで続いたが、あいかわらず部屋は同じである。
　しかも、幾美は、中学であれた太一をカスのようにしか思っていなかったから、兄妹といえども年頃の男の前で平気で着替えたり性欲の処理をしたりする。また、すれ違いざま、少し服が触れただけでも、
「太一が触った！」
　と、そのまま脱ぎ捨てて二日は泣くし、それでいて、機嫌がいいと、
「太一くん、太一くん」
　などと抱きつくのである。
　いつだったか、太一が帰宅すると、隠ししまい込んだいかがわしい本を幾美が太一の机で笑いながら読んでいたのをみて、
（なんでこいつが姉弟なんや・・・）
　と思った。
　これは、まだまだ先の話であるが、そういうふうになるのではないかとマオは九歳の幾美を見て予感していた。

　大塚家の男どもは、性格は違えど、趣向はおよそ同じかもしれない。
　例えば、大塚が風呂場にタブレット（PC）を持ち込んで長風呂するとすると、一路は、石やら亀を集めては並べて喜ぶ。おかげで、マオの家にその在庫の一部が飼わされているが、風呂場にも太一のおもちゃがずらりとある。
　おもちゃといえども、アヒルのような可愛らしいものではない。
　エイリアンやプレデターのフィギュアを風呂場に持ち込んで、湯をかけたり沈めたりして遊ぶ

のだ。
　入浴剤を入れようものなら、風呂底からぶくぶくと泡をたてながら、エイリアンが湯船に顔を出すという奇妙な演出をこの男はやる。
　はたから見ると妙な趣味の持ち主であったが、太一は、見てくれのすごい生物は平気でも、シンプルな物は怖いようで、エイリアンは平気でも、グレイタイプの宇宙人や霊といった見えないものを怖がった。
　大塚は、
「マオちゃん、こんなんいらん？」
　月末になると衝動買いした機器をもってきて、つまりおよそ、自宅では明美に怒られるので、マオの家が大塚家の実験場と保管庫である。
（しょうがない奴ら・・・）
　一見すると、所帯持ちの部屋のように、マオの自宅は物がある。幾美が潔癖なのは、そういう男どもへの反発だろうか。

　二年が経った。
　二〇二八年。マオも、いよいよ四十である。
　あいかわらず独りで、結婚する気はないようだ。
（人生の折り返し地点か・・・）
　そう心では信じているが、本当は、半分も生きていないのではないかとさえ考えている。
　なにせ、この時代の日本は、カロリー管理社会となり、ガンも克服されて、ちょっとやそっとでは、死にそうもない。
　デンマークの大学には、
「平均寿命、百歳一一」
　などという報告を受けてしまい、死ぬのも義務になりつつある。これは、いいことなのか、悪いことなのか、結果は、悪いが正解だ。
　ずいぶん前に、社会保障も年金も破綻してしまったが、少子高齢化はおさまる気もしらず、日本は、巨大な年寄りの養殖場と化していた。それを「ビジネス」と呼んだ嘘つきたちは、採算が合わねば逃げ出し、お上に向かってインフラ(社会を保証する)だと叫んで臆面もない。
　考えれば、恐ろしいかぎりだ。少子化に一役買っているマオとしては、数十年後、人様の手をわずらわせ、哲学の外で孤独に死んで行かなければならないのだから。
　いま、結婚を迫る男がいる。が、遅きに失する。自分よりも一回りも年上であるから、確実に先に逝くだろうし、子供を生むには、年齢的にリスクがある。なにより、
「怖い・・・」
　何がか？最終的に、一人になるのが、だ。そのくせ、早死するという算段がなく、むしろ、長命であるという判然とはしない自信だけある。決してマオは、生命至上主義ではない。ないが、死とは見苦しい「生」への執着にまとわりつく現実であり、あれこれのカミ様が、
「もうちょっと生きていよ」

　というのであれば、長生きするのもやぶさかではなく、そのやぶさかにまとわりつく諸々の事象が複雑に絡んで怖いのだ。
(ふん尿ぶち撒けて、人様に辱めをさらすくらいなら、いっそ「おさらば」するもんね！)

　さておき、主題は、四国においての徳島である。
　本当は、徳島が州都になったとき、順都構想といって、旧県庁所在地を順番に州都にしていき、順に発展させようというまとまりだった。
　しかし、先の原発事故による反対派が今なお多く、原発（伊方は廃炉途中）を抱える愛媛は州都から脱落したし、自然エネルギー推進に力をいれた香川は、かつての太陽熱発電所を、
「宇宙太陽光発電」
　施設として復活させた。
　宇宙太陽光発電とは、宇宙空間から太陽のエネルギーをマイクロ波に変換し地上へ送り、それをまたエネルギーに変換するという、この時代の時点では、威力こそしれているが、ITER（国際熱核融合実験炉）やもんじゅ（高速増殖炉）に続く永久のエネルギー源になっている。
　その発電方法をめぐっては、マイクロ波だから人体にはたいした影響もないのであるが、なにぶん、あたらしい技術は周辺住民を不安がらせた。そして、不安がイデオロギーを作り出し、この半永久の自然エネルギーも原発扱いとなっている。
　しぜん、この四国においての大都市は、州都の資格を失った。高知は徳島寄りの方が発展することを知っていて、消去法的に、いまだ徳島が中心である。
　中心だから、関西のマーケットは、子分である徳島へ、淡路を通じて来るらしい。
「連結州にしてはどうか」
　という無茶な議論もたびたび起こった。
　東京名古屋間はリニアでつながり、北海道、長崎にいたるまで、高速化の時代、四国も神戸からそれがやってきている。
「エアロトレイン」
　の着工である。
　エアロトレインとは、地上を飛ぶ飛行機のような高速列車で、神戸と徳島を二十分で結ぶという。
　そう書くとたいそうなもののように聞こえるが、予算で言うとリニアよりも安上がりで、　地上すれすれを飛んでいくので、レールはいらない。いるのは、防音壁くらいのもので、既存の高速道路の脇にレーンを作ってやればいいのである。
　神戸鳴門、二十分。しぜん、鳴門駅周辺の大開発が始まった。
　かつて、高速バス開通の教訓から、ストロー現象を危惧する声もあったが、二十分で繋がるということで、出て行くよりも、関西の人間が、そこそこの環境の徳島に魅力を感じてベッドタウンになりつつある。
　人口、合併も手伝い、増えに増えて、十年ほどで徳島市が百万になる。過去の予想では、四国の人口は数十年で激減し、年寄りばかりになるという。だが、国柄を喪失しつつある小さな島国

においては、田舎ほど人口が増えていく構図を、不安を煽って飯を食う人たちは、反省の期日すら明確ではなく、本当は、先のことなど誰にもわからないというのが、素人なりの都市論だ。
　鳴門も再び四国の玄関となり、特別区だから、カジノやマイスの建設で、目を見張るほどの変貌である。
　金が動く背景には筋の通らないことをやった証拠であるが、とりわけ、
「OD05（中国の政府系ファンド）なのが不気味だ」
　と、マオの叔父はいつも言う。この男もずいぶん儲けたが、好景気なときほど影でよからぬことが動いている。
「どっちが都なんだか・・・」
　マオは、北島にある友人のマンションから両市を見渡しては、よくわからないながら変わっていく街並みを比べては、
「あっち（鳴門）にビルが立っている」
　だの、
「こっち（徳島）にも何かできとる～」
　と、バスに乗った子供のように、変遷をからかいおかしんだ。
　しかし、結果、州都である徳島市のビジネスはみな、鳴門市にもっていかれるので、どちらが州都なのかわからないという、都市における二眼レフ構造が、この小さな島国でおきている。
　友人は、都会化していく郷里をさも誇らしげに眺めつつも、変化のスピードに戸惑い、自分の「まち」ではないかのような複雑な思いになるという。
「昔は「駅前」言うたら、徳島駅のことやったのになぁ。いまや、どこでも駅前なんよな――」
　そうか。これが徳島という感覚なのだとマオは気づいた。

　この時、一路は十六である。勉強はできたから、おのずと進学校に進んだが、賢い反面、少しオタク臭をおびてきた。
　オタクと言っても、PCオタクのようなものなのか、海外のサーバーの保守のアルバイトをやったり、量子コンピューター”だの“移動スピン共鳴”だのという、なにやら意味不明な配列を見て喜んでいたり、ITには少々詳しいマオでさえ、この技術屋ベースの高校生にはついていけない。
（いつから、こうなったのか）
　おそらく、小学生の頃である。小学生でCを覚えた。それは、マオのせいである。
　そのCで教えてもいないのに、クリックするとドライブのトレイが開くというしょうもないソフトを作ったことがはじまりだ。
　以後、しでかしが高度になるに連れて、マオの頭は挫折していったが、そんな一路を見て自分を振り返ってみると、SEなど、こういう技術屋の手のひらで踊っているだけの気取り屋であったということが、しみじみとわかった。
　いまでは、一路をからかって、
「先生」
　などとマオは呼んでいるが、その先生も、マオの自宅に住みこんで一ヶ月になる。

「昔の歌に、どういうわけか、ばあちゃんと暮らしていて、便所掃除が――」
　大切なのだというフレーズをこの四十の女はよく歌う。一路はぽかんと聞いているだけだったが、今の状況は、まさにそのとおりであるかのように、マオは示唆でもしているのかもしれない。
　ただ、二言目には、
「じいちゃん、ばあちゃん子は、三文値打ちが下がるが“マオちゃん子”でよかった」
　ともいうのである。
　発端は、不審からはじまる。マオは、四十にしてストーカーに悩んだ。いつも何かが後をつけてくるし、住居は店の二階にもかかわらず、洗濯物はごっそりやられる。何度拒否してもメールには婚姻届のPDFが送られてきて、いいかげん、怖いと思った。
　少し、ノイローゼにもなった。弱音ははかなかったが、心配なのか、明美は、一路をマオのところにやっている。
　それがきっかけでマオと暮らした。当面だったが、居ついた。しかし、当の母親は、第二の母親のマオ宅は、「はなれ」とぐらいしか思っておらず、一路がいようがいまいが、あまり変わりはなかった。
　学校は遠くなったが、姉のようなマオとの生活は気楽であった。
　更年期障害の母親とは違い、くだらないことでガミガミ言わない、料理の味付けは母親よりも濃い、店を手伝えば小遣いも入った。
（快適だ）
　と考えるのはどうしようもない。一方で、第二の母親といえども、マオはお姉さんの要素ももっており、見かけよりはずいぶん若い。スラっとしていてスタイルがよく、性格は学生気分の子供目線であるし、それでいて、無防備で母親よりも下着が派手なので、気を使う場面が往々にしてある。
　こういう性格だから、
（ストーカー被害にあうのではないか・・・）
　と、一路はつくづく思うのである。
　いつだったか、一路が風呂に入っているとき、マオがタオルも巻かずにすっと入ってきたときは驚きで呼吸が止まりそうになった。
　マオにしてみれば、おしめも変えて、つい最近まで、一緒に風呂にいれてやったという感覚だから、そういうデリカシーは皆無に等しい。ただこれは、ジャネーの法則の密度違いで、マオの最近と一路の最近とでは、感覚として全く違った。
（居心地が悪いのではないか・・・）
　と思うようになるのは、一路が男である以上、どうしようもない。
　筆者は、このお話を奇妙な官能小説にするつもりはないので、一路とマオの結末に期待されるのは遠慮いただくとして、さて、ここからが、主題のはじまりなのであるが、予定の紙数に達してしまったので、この辺で筆を置いておきたい。

「大きな足のナナメから」

http://p.booklog.jp/book/41243

著者 : 4951
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/4951/profile

参考文献
東京MX・SAPIO

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/41243

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.